



標  
花  
物  
語  
抄

一



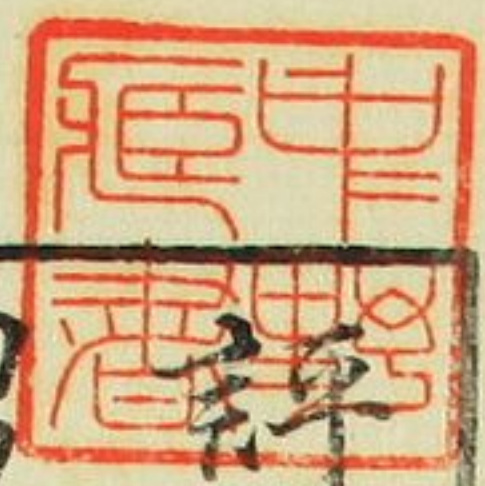
小中村義象  
関根正直

標註

版權所有

榮花物語抄 全六冊

東京書林 六合館發行



評註榮華物語抄序



男子多才乎。女子多才乎。吾不待而知  
之也。李杜之詩。韓蘇之文。女子而有能  
之者乎。無有也。米爾敦之詩。黑業倫之  
文。女子而有能之者乎。無有也。願視本  
邦之文學界。奚其事之相反耶。紫氏之  
源語。赤氏之榮華。獨行亦千年之間。賢

紫氏之榮華

學在書言抄序  
眉男子對之。莫不芥然沮喪。何漢歎女子之不才。而本邦女子之多才耶。然余不遑哀漢歎女子之不才。而不能不哀本邦男子之不才也。蓋男女之才不才。以比較言之。女子之不才。非女子之不才。而男子之多才也。女子之多才。非女子之多才。而男子之不才也。天曆永延

之際。朝綱不振。縉紳皆宴安偷惰。不獨無經世之大才。其於文辭。亦皆柔弱委靡。莫之觀者。宜其運思之密。用筆之巧。竟不及婦人女子也。余常嗤當時男子之無氣骨。而又歎後世之男子。皆位類於紫赤二女史之前。每復自奮欲出乎源榮二書之上者也。頃少友閩根小中

却二子。將抄赤氏榮華。加之註釋。以便  
學國文者。今以榮華比源語。其文之巧  
妙。或若翰一着於源語。然源語虛構而  
榮華事實。學文之次。務兼使知事實。二  
子之用。意可謂至矣。二子抄此書之意  
果何在。欲使學志永屈膝於女子之前  
乎。抑欲使依此書養文志。遂得出蓋之

譽乎。本邦文氣之不振也久矣。粗心者  
率意下筆。不知修文法。細心者甘立古  
人之踵後。而不能自奮。能採其長而不  
蹈其弊。志天下其有幾。學者倘能細心  
以則古人之法。豪氣以脫古人之窠臼。  
則本邦之文氣。將從是見隆興之運矣。  
善成此事業者在男子乎。在女子乎。余

不能預卜之也。

明治廿三年十一月

東京學士會院學士西村茂樹識



若林常猛書



源氏物語なるものなればこのよき文章  
こそあつてたゞこれとてさるるうらは  
あつたなり。このよき文章は  
まじりて史學ふたまたまさるるをこの  
業の物語を文章のめてたゞこのうら  
ふそのよき文章なり。このよき文章  
にまじりてよき文章なり。このよき文章

もなまさし〜形をまじへたるまじりて國文教  
科書あはいとよきいふとたりんるるを  
いふて世も行をれまゝは文字のあわ  
まれるおちたるたよんおほくまゝいせせ  
る注釋のまもたゝしてまゝのすまゝあ  
まゝなりんれまゝいまぬ此人よみ  
ときかぬとせ〜おきかちれるを小中村

岡根のあ氏いぬとよおひいゝいこ  
れ書の中乃とよすれ〜か〜我ぬ  
まゝ〜福む〜詠り〜注釋のことをを  
せ〜は〜教科書れまゝうけとらられ〜  
りか〜て〜さう〜めふまのめてたさま  
まはま〜い〜てみゆまよみむ人こか  
ま〜よは文章をあらはひ〜い〜よま

歴史を——としていそゆに一挙あはれ乃  
そあるへ——こよるこひおひまををか  
らたぬむ

明治二十二年十二月のあめ

蘇舎はあ——心風はるん

標後茶花物語抄

緒言

一茶花物語を、村上天皇の御時より、堀河天皇の御時まで、おぼ  
よそる四十餘年間の、事蹟を志るせる書少して、甲帖有り。  
當時を藤原氏もたら政を輔け申し、頃なれど、その記せる  
ことも、おれ氏ふか、おぼるが多きを、おのづうらなる勢ひな  
り。そもく承平天曆以降、物語といふ書行なれて、それら、世態  
人情をうつし出せを、まことせしかりしよ、中よを、あざりしきふ  
——さへ、思ひ知るを、この物語を、おぼるおれといかたりて、これ  
年ふるお禁裡の書ありさまなど、たがありのま——に、おきとり  
たるおれなれば、歴史の一として、思ひむもいと、貴き書也。  
一この書を、茶花といふも、名づけたるを、清堂冥白道也、公の、榮花

をむすとかきたればなり。一名を世継物語ともいふ。作者を  
赤澤御門とも、藤原朝臣為業とも傳へるれど、名戸の人安藤  
為章氏が、はやく傳じたる如く、紫式部赤澤御門、さてハ諸才  
女、ちの日記家集などを取集めて、つづりなすことなる  
こと、後みもてゆく中、ふあきららうふ見えたり。又伴信友氏に  
第三十一段以下を、後人にかきつぎたるも、はなりといわれ  
しもの、さることなるを、

一この書、せよ流布せる刊本ハ、明暦板の小本と、活字の大本と、  
抄出繪入の九冊本となり。いづれも誤脱ありて、読みが、さき  
を、近年小杉榎邸ぬしの、校正せらるる、いとよろし。さて近  
き、この後、國文に学びやうく、ゆをれて、諸學校よてもこの科を  
なす、さるに、伊勢源氏の類ひを用ゐむも、はしたなきこと、多

く、昨取うつぼのもの、遠きもいらざるし、きふこの書ハ、唯文  
章の免でたきのみならず、おもひひ、どく、歴史として、も  
見るべきも、なす、教材用といへ、能く適なり。されども、四  
十帖の長きを、ことごとく、後まむも、たやま、あらむ、さりとて、九  
冊に抄本も、あまり、ふ省きたれば、今、か、是を、折衷し、ある  
を、削りあるハ、添へ、などして、更、小標注を加へ、ま、か、九冊  
本なる画をも、抜き、さき、さみて、標注、茶花、物語抄と、名つけつ。み  
づ、う、圖らざる、罪、い、あ、け、き、ども、偏、教科の用、供し、市  
國の文学をして、い、その、先りを、放た、む、むと、さる、微衷  
の外、ならむ、なむ。

明治二十三年十二月



標註 榮花物語抄

目錄

① 月の宴	卷一	一丁右
② 花山たづぬる中納言	卷一	廿三右
③ さまぐのよまらこび	卷一	三十四左
④ 見はてぬ夢	卷一	四十四右
⑤ 浦々のわこのと	卷二	一丁右
⑥ かぐやく藤壺	卷二	廿六左
⑦ とうりべ野	卷二	三十二右
⑧ はつ花	卷二	四十二左
⑨ いも蔭	卷二	五十九左
⑩ 日かけのかつら	卷三	一丁右

① つほろ花	卷三	十五左
② 玉村菊	卷三	廿七左
③ 木綿四手	卷三	三十四左
④ 朝緑	卷三	五十八右
⑤ うたがひ	卷四	一丁右
⑥ もとれ栗	卷四	九右
⑦ 音楽	卷四	十八左
⑧ 玉のうてゑ	卷四	廿七右
⑨ 御着裳	卷四	廿九左
⑩ 御賀	卷四	卅七右
⑪ 後ぐいの大將	卷四	四十二左
⑫ 鳥のまひ	卷四	五十右

⑬ 駒くらべの行幸	卷五	一丁右
⑭ わろをえ	卷五	九右
⑮ みねの月	卷五	廿二右
⑯ 楚王の夢	卷五	三十二左
⑰ 衣の珠	卷五	三十九右
⑱ わろをえづ	卷五	五十右
⑲ 玉れうざり	卷五	五十三左
⑳ つるのはやし	卷五	五十八右
㉑ 殿上花見	卷六	一丁右
㉒ 歌合	卷六	八左
㉓ きるはわびしと歎く女房	卷六	十六右
㉔ 晚待星	卷六	廿一右

- ⑤ 蜘蛛のふるまひ
- ④ 根あはせ
- ③ 煙後
- ② 松の志つえ
- ① 布びきのたき
- ① むらさき野

卷六	廿三右
卷六	廿四右
卷六	廿六左
卷六	廿七左
卷六	卅二左
卷六	卅四左

標注 榮花物語抄卷一

① 月の宴

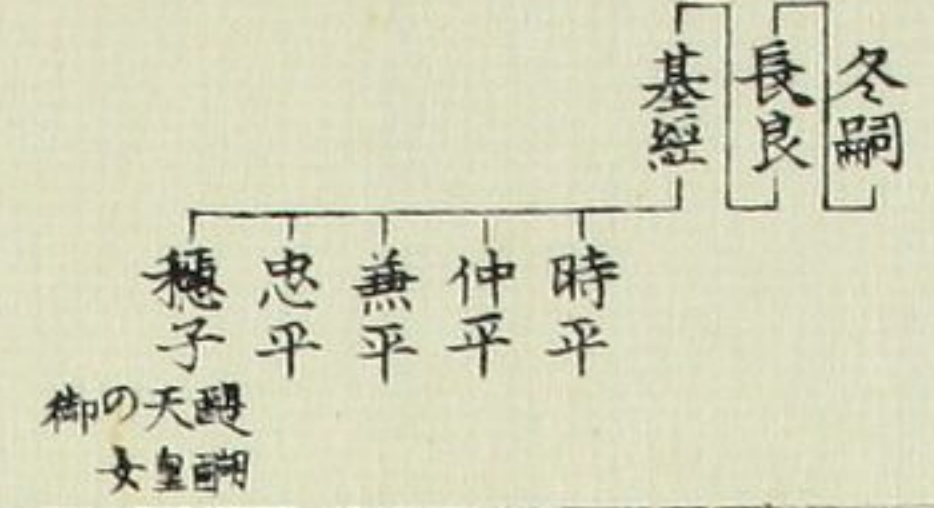
小 中村義象  
関 根 正 直  
標注

月の宴 この巻を  
かく名づけたるを  
村上元宣康保三年  
八月十五夜湯浴殿  
小松にて月見法宴せ  
させ給へりすあり  
ふよりてあり  
こちよりてのこ  
近き代の事といふ  
義あり  
敷仁親王 流布の  
本小いかなるてあ  
つぎみ親王とあり  
されど大後ふそあ  
つひとくえんより  
女御 これハ天子  
の持寝不侍せる女  
官の稱あり大宮の

世始りて後此國のみかど六十餘代ふあらせ給ひよ  
けをどこ乃次第かきつゝもづきよあらばこちより  
ての事をぞ記すづき世の中又宇多れ帝と申まみ  
おのれをいへりけりそみみいどこころち阿まらおを  
いまけり中ふ一れみこ敷仁の親王と申しけるそ位  
よつかせ給むけるこそい醍醐れ聖帝と申して世の中  
ふ天此下免でた記さめいよひき奉るなを位よつか  
せ給ひく卅三年をたもよせたまひける母多くれ女

判りてい皇居の外  
小妃夫人嬪の三著  
ありしが此ころい  
それらの号絶えて  
女御更衣のふつ  
ふなり

かの侍三郎 長良  
の三男ある由をい  
ふん其系統左の如  
し



御たちさぶらひ給ひけむを男みこ十六人女もこあ  
まゝおとゞましけり。其頃の太政大臣基經のおとゞ  
ときこえけるは、宇多天皇御時ふりせ給ひける中  
納言長良ナガラと聞えけるを、太政大臣冬嗣の御太郎もぞ  
おとゞける。後をも贈太政大臣とぞきこえける。かの  
御三郎もぞおとゞける。それ基經のおとゞりせ給ひ  
て、後にお誂昭宣公と聞えけり。その基經のおとゞ、お  
とゞ君四人おとゞけり。太郎の時平ときまえたり。左  
大臣もぞ成給ひて、卅九までぞりせ給ひよける。次郎  
仲平ときまえける。左大臣までなり給ひて、七十一  
までりせ給ひよたり。三郎兼平ときまえける。三位まで  
ぞれば、けり。四郎忠平のおとゞも、太政大臣まで成

みろどふるさせ給  
ふ 帝位小即きた  
まひーとたり

皇女御 醍醐天皇  
の皇子保明の御ま  
申し、女御の朱  
雀院の女御ふあり  
拾へるまで玉族不  
ておとゞれがた

給ひく、多くの年ごろすぐさせ給ひける。その基經は  
おとゞりし御女の女御穂子はらふ醍醐の宮におありま  
たおとゞましける。十一の宮寛明の親王と申しける。  
みろどふるさせ給ひて十六年おとゞまして、後にお  
りさせ給ひくおとゞける。とぞ、朱雀院のみろどとを  
申しける。そのつぎおとゞりし女御の御腹の十四のみこ、  
成明村上の親王と申しける。さうつぎみかどとるを  
せ給ひよけり。天慶九年四月十三日、みろどふるさせ給ひ  
ける。朱雀院の御子たちおとゞまされけり。たゞ、  
女御と聞えける御はらふえもいそびうつろしき女  
みこ、一存ぞおとゞましける。母女御もみこ三までり  
せ給ひより、をこるとおとゞれ一所心づるしきものふ

例なきこと  
村上天下と昌子内親王と  
昌子内親王の清問を  
ば宮内少輔を奉ら  
むと近き世ふも其  
例なきこと

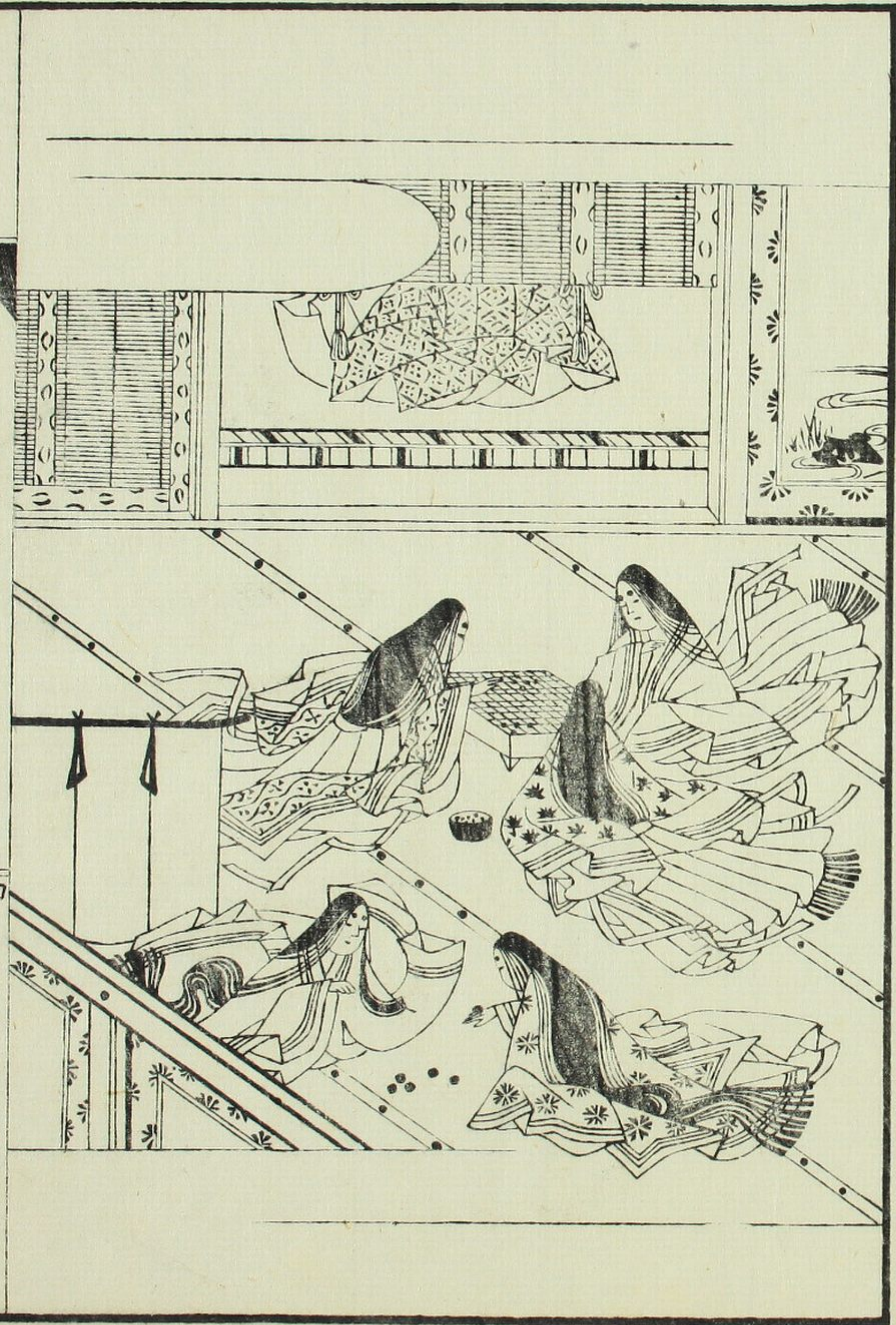
堯の子の堯からむ  
やうふ 帝堯はも  
ろこのの聖人なれ  
ども其子不肖な  
りしふ我朝も碓  
磔聖帝の皇子ふ村  
上の聖王生まれま  
したる堯の子ふ堯  
の生れたらんやう  
ごとし  
ものから この語  
二つの意あり一  
すものからつらの意  
又一のゆゑの

養ひ奉り給ひける。いふで后よまを奉らんとおぼし  
けれど、例なき事にて、うちをくしてぞ過させ給ひけ  
る。昌子内親王とぞ聞えさせける。かくて今のう村上つは  
御心を、つらまふくあるべき限りおぼしめしけ  
り。醍醐の聖帝世ふめでたくなれども、まけり。又この  
みうど堯れ子の堯あらんやうなれども、此御心を  
への、をくしうけぶくが、こうれをしまはものから、  
御ぞえものなりなむ。和歌れうたもいふと、うたませ  
たまへり。よろづよなきけり、物のをえおぼしめし  
そころは、女御をよまを奉らありあつまり給へるを時  
あるも、時なきも、御心づきの御どことよなきれといさ  
さう恥がましげといふほしげふも、おれどもせ

意ありくならぬ  
あつたことさ  
そころ 野多  
いんが如し  
御息所 一体を女  
侍のうちにて、子  
生み給ふをいふ  
祢なれども、此書の  
例にて考ふれば、あ  
ならちよきものな  
ら如し  
時あり。 時ふあひ  
て、君龍のまぐさ  
たるをいふ  
なめ 普通の語  
ふ大低といふ同  
じ  
なからり 平等と  
いんがとしあま  
たの女侍とちを一  
体と思へり。その  
一つも、偏依なく  
平等の扱ひ給ふを

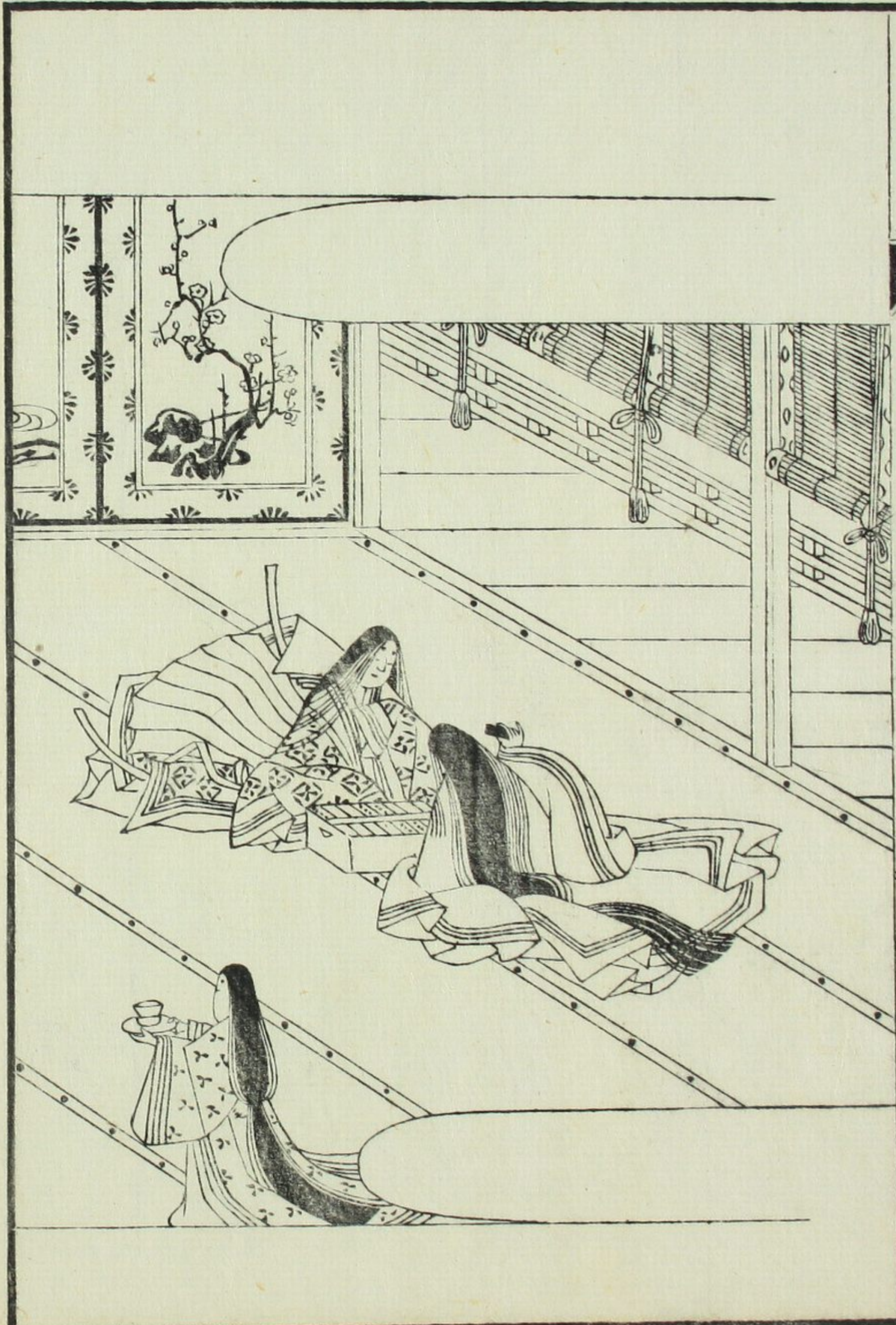
させ給はず。なのめなきけありて、めでさうおぼし  
えし、わくして、なだらうよおぼてさせ給へる。この  
女御をよま所達乃御中も、いとめやまきびんなき事  
まおえずくせ、あうらぶあどして、御子生を給へる  
い、はるうたふおぼし、くもてあさせ給ひ、さらぬを  
さづり、御物いとあどふて、つとて、おぼしめさる  
目などい、御前ふえい、いで、基すくろくうたせ、るん  
をつかせ、石あとりをせさせて、御覽などおぼせ、お  
ぼしめし、れを、皆う、こまなきけを、い、さう  
うなむおぼし、いひける。

花物語



四

火牙行牛言打



さらぬいさつう  
佛子生み給いぬえ  
まこせやうあとい  
ささういさづくの  
音便て給るる  
をんをつりせ  
んつまとして漢字の  
つくりをわして教  
この書を附くる載  
れをせさせ給ふ  
石なとり 今の女  
の童がまあるま玉  
をさるといふこと  
むのしん其の石を  
こそ用ゐるけり捨遠  
集

かくみらぐとの御心れめでたけきを、吹く風もえだを  
あささびたなどあまをよや。春の花もふやひれどけく  
秋れももぢも枝ふとままりいと心のどのなる御あ  
りさまなり。只今の太政大臣もて、基経のおととれ  
御子四郎忠平のねとと、みかどの御をぢふと、世をま  
つりごちておとれ。それねとと乃御子五人ぞねをし  
ける。太郎いまれ左大臣もて、實頼ときこえて、小野  
宮といふ所又住給ふ。次郎へ右大臣もて、師輔のおや  
ど九条といふ所又住給ふ。三郎の御ありさまおぼつ  
らなうし。四郎師氏と聞えける。大納言もてぞ成給ひけ  
る。五郎師尹の左大臣ときこえて、小一条といふ所又  
住給ふ。さまを只今いこのおまきねととの御子ども、

を皆とらふてひ獲  
せじといふ歌あり  
みらどの御をぢ  
忠平の妹孫子村上  
帝の侍母かれば物  
申ま

やがていややんどとなき殿ばらもておえは。此殿を  
ら皆おのく御子どもさまもておまける中、九条  
の師輔の大臣いとたらししくねをして、あまこの北の  
方、此御腹小男十一人女六人ぞおましける。小野宮の  
左大臣殿い、その二君三人をかりぞおしける。女君  
もねをしたり。一所を宮腹の具もておまは。さつづき  
い女御もておましたり。次くおまもておまは。小一  
条の師尹のおとと、おのこたご二人女一所ぞおまし  
ける。をのこ一人いはりなりなう給ひまたり。かくて  
女卿たち何もたまるり給へる中、九条の師輔のね  
ととれ姫君あるが中、一の女御もてさぶらひ給ふ。  
又今の帝は御はらうらの、重明の式部卿の宮に御む

を具して其の  
一再嫁し給へる  
いふ

まこと元方民治  
の女も かく殊更  
小取りいていへ  
るいこれふつきて  
の物語を書きつ  
ばなり  
東宮もかくて再び  
失せ給ひぬ 醍醐  
帝の第四皇子保  
物王五坊の母かく

まめ、女御ふておを以。又同ト御をらから此代明の中  
務の宮に御女、麗景殿の女御とてさぶらひ給ふ。又在  
衡の按察大納言のむまめ、あせられ御息所とてさぶ  
らひ給ふ。小一条の師尹に地とて御女、いことう言  
つゝゝゝて、宣耀殿の女御と聞えさ。又廣幡中納言  
唐明の御女、ひろまたの御息所とておを以。さて此  
御り、皆御子生を給へるもあり。こころまきたま  
えぬ御息所たちもあま、さぶらひ給ふ。まこと元方  
民部卿のむすめと参り給へる。年ごろ東宮もかく二  
たひうせ給ひぬるふ、東宮をさせ給へぬ、こころまき  
らひ給ふ御り、あやしう心もとあぐこ生を給  
はざりける。なごよ、九条殿の女御たちもねたし

れ給ひ、文彦太子  
と極を其子慶  
王さしつゝき坊  
をたまひ、これ  
もやがて失せ給  
れば死すべし  
のいひさる、もの  
ひさるをいふ今  
の罵言まこと小  
ちあらむ  
たいあらぬことの  
よ、懐胎の由を  
奏し、我里亭に退  
出するなり。此頃禁  
中おぼして、産後を  
思むはよふて、  
侍をかし、御佩刀  
ふて宮子生まれ給へ  
る帝の御もとより  
下し賜ふこと空れ  
る儀なり

さで、めでたしとれ、あり、かど、女みこよていと  
いあねむどふ、たひ、のよて、さぶらひし、まきで、うせ  
させ給ひぬるふ、元方の御息所、たごならぬ事、のよし  
申して、まうで、給ひぬる、ま、あ、こみ、こころ、まき、給  
へるもの、なごよ、又、あ、う、め、で、た、か、る、ま、き、こ、と、ふ、世、の、人  
申思ひ、さるふ、一、の、こ、生、を、給、へ、る、もの、か、あ、あ、め、で、た  
い、ま、じ、と、の、あ、り、さ、り、内、より、も、御、を、ら、し、より、は、じ  
めて、例、の、御、作、法、れ、あ、と、も、も、ま、も、て、あ、し、聞、え、給、ふ。  
元方大納言、い、み、と、と、お、が、し、り、東宮、い、ま、ご、世、ま、れ  
ま、し、ま、ま、ま、ぬ、ほ、ど、な、り、あ、ま、の、ゆ、え、ふ、り、わ、が、ま、こ、東宮  
ふる、あ、あ、ま、ち、給、を、ん、と、た、れ、も、し、く、お、が、さ、れ、り、い  
み、と、う、世、ま、中、小、の、あ、る、程、ふ、九条殿、の、女、御、た、ご、ふ



さきにもおちり  
前小室女の子世し  
給ひしあををい  
ふ

うとうぬら  
川 上りもある如  
く忠平の帝の志叙  
父はあつり給へば

とわらうまらばといふ事、おのづから世よりも聞ゆ  
れど、元方の大納言いできりともさだのこととも阿  
まきたも聞きおひらり。おのづから九条殿もいとう  
を志すうおぼせおどまらうへい世いとも阿まかうもあ  
れ。一社黄平をこねをまるをうまうたのもしき事おれ  
が、免後。ことよりありかゝるおどまらうへい世いとも阿  
まかうもあ。ごら悩ましくおぼせたりつらう、天曆三年八月十四  
日うせおせ給ひぬ。此三十六年おのづかの位よておを  
し、ましけるを御年としそ七十は成給ひおける。左實頼  
右の坊もおたちも、いとまらめでたいたのしおし御  
有さまなり。みうどうとうぬ御あつらひよてよろ  
づりびくの御あともめでたいて過ぎもていきき女安子

あらづらうみ  
此一族の女たち  
女御お奉り給へる  
をいぬ  
御服云々 祖父の  
忌服をうけて退か  
し給へり

つくりき  
の人たる者其位は  
居りくらゝき程不  
まられたる二の人  
といふとく一人の  
といふ執柄の大臣と  
いふ

心ごとふ 格別お  
といはん程なり  
世のおほえ 世の  
のおもろくもこれ  
ハ殊小姫とてき  
由なり

御も御服も出給ひぬ。宣耀殿の女御も同くふく  
よて出給ひぬ。心のどろふ慈悲の御心ひろく、世をた  
もたせ給へる。世の人いふとくを申し後の御  
謚貞信公と申し、つぎの御ありさま、阿まきと  
めで、過ぎもていく。世中のことを、實頼の左大  
臣つかうまつり給ふ。九条殿師輔二の人よておをまらど、  
なほ一とく二とぞ人思ひ聞えさせためる。の  
る不どお年もかへりぬきを、天曆四年五月廿四日、  
九条殿の女御男安子みこころ奉り給ひつ。内よりい  
つら御をうてまらりたなり。御有さま心お  
ふめで。世のねえおとみささおの志りたり。  
元方此大納言かくと聞く、胸あつらる心ちて物

あさましき元  
 方大納言失望のあ  
 まりあさましき還  
 ちして若宮を呪咀  
 などもあつべきや  
 とありかくて由の  
 思ひ尽さぬ病ひと  
 なりて同じくハ我  
 外孫の皇子の弟を  
 子小引こされん取  
 をんぬさき不死ふ  
 んと思ふよ也  
 うぶやの儀式  
 産所の賀儀も受  
 せむる式あり  
 小野宮の指とゆ  
 云く 安胎ゆこれ  
 我が姫の生み奉  
 れるなれば元方の  
 女の生めるよりハ  
 嬉しとおぼしめさ  
 んと云

をだよもくもむなりふたり。いといとじくらさま  
 き事をも、志あやまらつべこのめるく船。物却もひつま  
 ぬむねをやみつ、病ひづさぬる心ちしく、おたをく  
 今いいうでとく死なむとの思ふぞげりうぬ  
 心あやや。九条殿よハ御うぶやれるどの儀式ありさ  
 まなどもまねびやんうさあ。おとこの御心れうち  
 思ひやるふ、さをりめたれとありあんや。小野の  
 宮れおとも、一乃御子よりいこさへうさくねが  
 さる。登し。みりどの御心の中ももふろづ思ひふくあ  
 ひうれをせ給へるさまよ、めでたうおぼされたり。を  
 かあう御五十日<sup>イカ</sup>あども過ぎとていさて、生給ひさ  
 三月といふ、又七月廿三日小東宮よ立せ給ひぬ。九条<sup>師輔</sup>

第五十日 誕生  
 五十日の祝ひをい  
 うといひて、これ  
 定まれるおぼ儀の  
 ろと云  
 えいみあつてさ  
 かふるめがさ  
 両がたは涙を  
 んハ思む日であれ  
 ど忍びあへば泣き  
 たまふと云  
 志ほたれぬ 涙  
 みぬるをいふ  
 やし いまじ  
 き義なり

殿ハおぼさきおとけうせ給ひしを返まぐくちを  
 くれがされてえいさあへむ志あつて給ひぬ。一れ  
 みこれ母女御のゆづとだよもまあつて志づとて  
 ぞあ給へる。いさとくゆ、たまでいささきこゆる。  
 とうれくて年月も過ぎて、こ乃御うぶが我もく劣ら  
 せつけじと、皆たごならはれを、御子たちいと何  
 またいできあつたり給ひぬ。按察れ<sup>正妃</sup>を所、とこ  
 三宮女<sup>保子</sup>三宮うみ奉り給ひつ。又この九条殿の女御男<sup>安子</sup>  
 四五の宮生と給ひぬ。又宣耀殿の女御男<sup>芳子</sup>六八の宮生  
 也給へる。六の宮いさあく成給ひたり。ハ  
 永平  
 此宮ぞたひらうみてねをしる。藤景殿此女御男<sup>莊子</sup>七  
 の宮女<sup>具平</sup>六宮生と給ひふけり。式部卿の宮れ女御女<sup>規子</sup>四

紫花物語少一

ころろさせ  
ろろさせ  
るさし

あふさふさ  
これい苗かむり  
名づくるお向の  
種ありまづ向毎の  
頭文字と拾ひ次小  
句の末の字のみ  
を讀めをあてせた  
まのまこととか

宮ぞうり奉り給へりける。廣幡れ御息所女五宮生れ  
給へり。阿ぢちの御息所をとこ九の宮生せ給ひたり  
して又九条殿の女御女七九十の宮なごりまよさ  
つきて生せ給ひて此御ありさま世よまをくれさせ  
給へり。かくいふほどお坊ゆり男宮九人女宮十人  
ぞおをしける。この御中もひろたるこの御息所ぞあ  
やしう心こふあつたせあるさまふみうどもお  
ぼめいりける。内よりかくなむ。  
あふはらも、まてをゆき、せだもるぞ。たづね  
ことひこ。まををかへさ。といふ歌を同くやうふか  
うせ給ひて御りつごふ奉らせ給ひける。此御返事を  
りつごさまふごふ申させ給ひける。ふ廣幡れやま所

る合字重箱少しと  
のまき下ふか  
謎の歌あり

なごその関  
といふ来のま  
は笑興ありあり上  
の歌小逢坂もま  
とある縁語とれ  
り

うつくし  
まのまあらせ  
つかしまは  
つかしまは

また起物をぞまゐらせ給ひたりける。されどこそな  
ほ心こも又見ゆもとおぼめり。いとほこそあ  
らもいづこの御りごとや。いみづく志とて、冬  
り給へりける。いもなごその関もあまほりご  
おぼさまける。御おぼえも目ごろふ劣りななりとぞ  
聞え侍り。宣耀殿の女御いみどらう字つくしげ  
れましましやもを帝もつが御りこしとのよぞい  
みどらう思ひさこえ給へりける。みうど筆の御琴をぞ  
いみどらうあそをしける。この宣耀殿女御ふならこ  
させ給ひたりける。いとくくうひまきと里給へりけ  
ると女御の御はらうの濟時乃少将つねにおま  
よ出でつ。さうりげあう聞きける。あといみどらう

御遊 當時あそび  
といふたつて管  
結して心を保つ  
る事いふこと  
あそぶものの中  
あそびむねとあ  
ものなればあ  
いふ河といふ  
なり

あそぶものの中  
あそびむねとあ  
ものなればあ  
いふ河といふ  
なり

くひさとり給へりけれをういさどし興ざさせ給  
ひさ召出しつゝをさしさせ給ひて後より御遊の初  
くはまづ召出でしと記上手まで物給ひけ  
る。此殿ばくの御心ばもども、同ト御はらうるあれど  
さまづ心くよぞねをける。小野のやのね實類の歌  
をいさどくよませ給ひ、まねがしきものうら、奥深く  
づゝいさ御心もぞおひける。九条師輔のねと、ね  
いさふ志る知らぬ分るす心ひろくあどし月ご  
るありて参りたる人も、たゞ今ありつるやうふげ  
ふくもどしてなさせ給ひ、むねとていし心やまげ  
よおぼしおれてさめれを大殿忠平乃人くおぼく、此九  
条殿あぞあつまりける。小一条の師尹師尹ねと、い知

あそぶものの中  
あそびむねとあ  
ものなればあ  
いふ河といふ  
なり

あそぶものの中  
あそびむねとあ  
ものなればあ  
いふ河といふ  
なり

あそぶものの中  
あそびむねとあ  
ものなればあ  
いふ河といふ  
なり

る志ぬ程のうとき睦まきさも、ねをしおがさぬほ  
どのぢぢめさやうななとてくせぐうぞねがし  
おきてたりける。それゆとさあどをううあむあり  
ける。東宮冷泉院やうくおよすげさせ給ひけるま、いみ  
どううつくうおはしままよつけても、九条殿師輔の御  
おぼえいさどうめとて。又四五の宮さへねと、ま  
ほぞめでたねやかゝる程よ天徳二年七月廿七日ふ  
ぞ、九条殿の女御安子后安子たゞせ給ふ。藤原の安子と申し  
て、今の中宮ときこえさす。中宮は太夫より帝の御は  
らうらの高明れ親王ときこえさせし、今、源氏よて  
例人ふたりておはまるぞ成給ひふける。つぎ、此宮  
司と心あるとよ選ひたさせ給ふ。九条殿の御けきせ

を申したまふ御  
り  
例人 なる人とい  
もとらふ御  
せしは源氏の姓を  
賜をりて諸君の列  
ふ入り給ひしつ  
ぎくの官司とい中  
官亮以下の官とい  
ふ  
女侍の侍中を  
をく云、去年  
懐胎中ふ失せ給へ  
れば

ふあるのひありてめでたし。ふ野の宮のね實頼、女御述子  
の御事をくちをしくねがひし。その宮乃おとど  
れ御太郎少将まで敷敷とそいとねがえありてね  
せしつとせうを給ひし。ぞうし。その御思ひよてい  
ミドく意忍び給ひける。とあづまのうさより人かれ  
少将の君よとて、馬を奉りられを見給ひく。ねとよ  
と給ひける。  
まご志くぬ人もあなり。あづま給ふ。我もあきて  
ぞすむべうりける。此殿大うの歌をこのと給ひられ  
た。今れ帝此うさふ深くおをまして、おくあ、此お  
とごもろともよぞよまかをさせ給ひける。  
かゝる程ふ后安子の宮も帝村上も四の宮為平を限りなきものふ

上達部殿上人 公  
御のとく大り  
位以上を上達部  
いひ四位五位の昇  
殿ありされたるを  
殿上人といふ

かしづく 大切に  
いさより育つこと  
と  
例の宮達ハ云、  
當時の婚儀ハ云へ  
て男の方より女家  
へ往きかす例  
なるにこれハ様か  
らうて皇子の御中  
へ迎へ参り給へる  
こと女侍更衣など

思ひ聞えさせ給ひけむ。其御氣色は後ひく、うろづ  
の殿上人上達部藤き仕りまつりて、もてそやし奉り  
給ふ程又、やうく十二三ばかり又おをせむ。御元  
服の事思し急がせ給ふ。御むすめもたまへる上達部  
へ、いみじう氣色ばみ聞え給ふ。宮の大夫と聞ゆる  
を源氏の左大将高明もいたびかしづき給ふひとりむ  
すめをさやうよとほのめかし聞え給ひければ、みか  
ども宮安子も御氣色さやう又思しければ、歡びくよろづ  
志と、のへさせ給ひて、やがそ其夜参り給ふ。例の宮  
達ハ、我さともおはしそむる事こそ常の事なれ。これ  
ハ女御更衣のやうふ、やうく内におはします。参ら  
せ奉り給ふ。と定あそむ例の女御更衣の参りハさ

の入り小似たりと  
これ我里より女家  
いふ更衣との女  
序の次小位して  
その燕寝小侍を  
云ふ  
今めりうて 俗  
ふ堂世風にてとい  
てんがらし  
按察の更衣 前  
もは息所とあり始  
め更衣なりしが  
子生て後ハハ  
ふなりふしを  
ふハもの称をか  
けるならむ  
あつて 俗  
ひ番場とつるこ  
と  
けぢらき ぬやま  
く人げ近くなつ  
しげなるをいふ

る事なり。これいとめづらかき、攝かたり今めかし  
りて、御元服為平の夜やがて参り給ふ。みう村上安子と名の御よ免  
あつかひの程いとをかしくなんみえさせ給ひける。  
かゝる程より按察在衛女の更衣に御腹の女三宮保子、こととをなん  
をう村上く弾給ふと聞しめて、みかどいかに其宮の  
ことときかん参らせ給へと、御息所在衛女みたび宣はせけ  
れば母御息所いと嬉しく思して、あつて参らせ給  
へり。上村上ひるまればつもぐおぼされけるに、わらせ  
給ひく、いづら宮いと聞え給へと、御息所御息所詞と聞え給  
ふ。此方保子いと聞え給へとを、みかどいで給へり。十二三  
むかりみていとうつくしげきけだのき様志給へり。  
けぢらき御けはひぞあらせまほ村上き帝いづも御

かなき 可き  
の妻之悲哀の義  
をあらは  
おだん給へり 似  
なるよ  
古代なるけし  
古風なる容体い  
ふ  
几帳 帷を垂れた  
るついたての如き  
ものく  
もの何と云  
これハ佛教の太  
を賦したる梵  
梵などあつて  
み今様歌の体  
うつし和賛と

子のかたきさは日き難う思しめされて、うつくしう見  
奉らせ給ふ。母御息所在衛女又おぼえ給へりと御覧はる  
御息所も清げとおはまこと物おいしくいかふ  
ぞやおもして、少く古代なるけはひ有様しく、みまほ  
しきけとひや志給らむ。姫宮保子ハまぶいと若くお  
まほまぶ、あてやうまをうくおまをう、御こととをいとをか  
しう弾給へと、みかど給ふや。是といかふ弾きたまふぞと  
宣はすれば、母御息所三尺の几帳を御身よそへ給へ  
るを、几帳あがらみざりより給ふほど、あま心づきな  
く御覧せらるるう哥、詞れとなすと道をまかれを經を  
ぞ一まき見つけたるをとりひろげて聲をあげてよ  
むものも、佛説のなかれ摩訶の般若の心經なりけり。

小あせせりたふ  
ものあり道もの  
とまうれば経を一  
巻又つけたるを  
何ぞと取りひらげ  
て勢をひいて後む  
ものそとくつ  
けぎまをうらう  
あして見るを  
あさましう おど  
るきあきるをい  
ふ  
廿年ふなりぬ 天  
曆元年の即位あり  
しよりこと一康保  
三年まで

前裁 庭前の裁  
ごみきいふ  
繪所別當 繪所  
式部内侍の東殿御  
書所の南にあり別  
當といふ宮ありて

又別に句書す故  
の称なり  
作物所 これい遊  
物所の西にありよ  
ろづ調度の類を懸  
ふる役所なり  
沙濱 後世の名  
といふもの海濱  
のかきをとりもし  
るがきもすうふよ  
り然あづく  
ませのかき 荒垣  
ごませかきといふ  
銀の籠と壁のやう  
小送りをして中に  
まことの虫をいれ  
しる

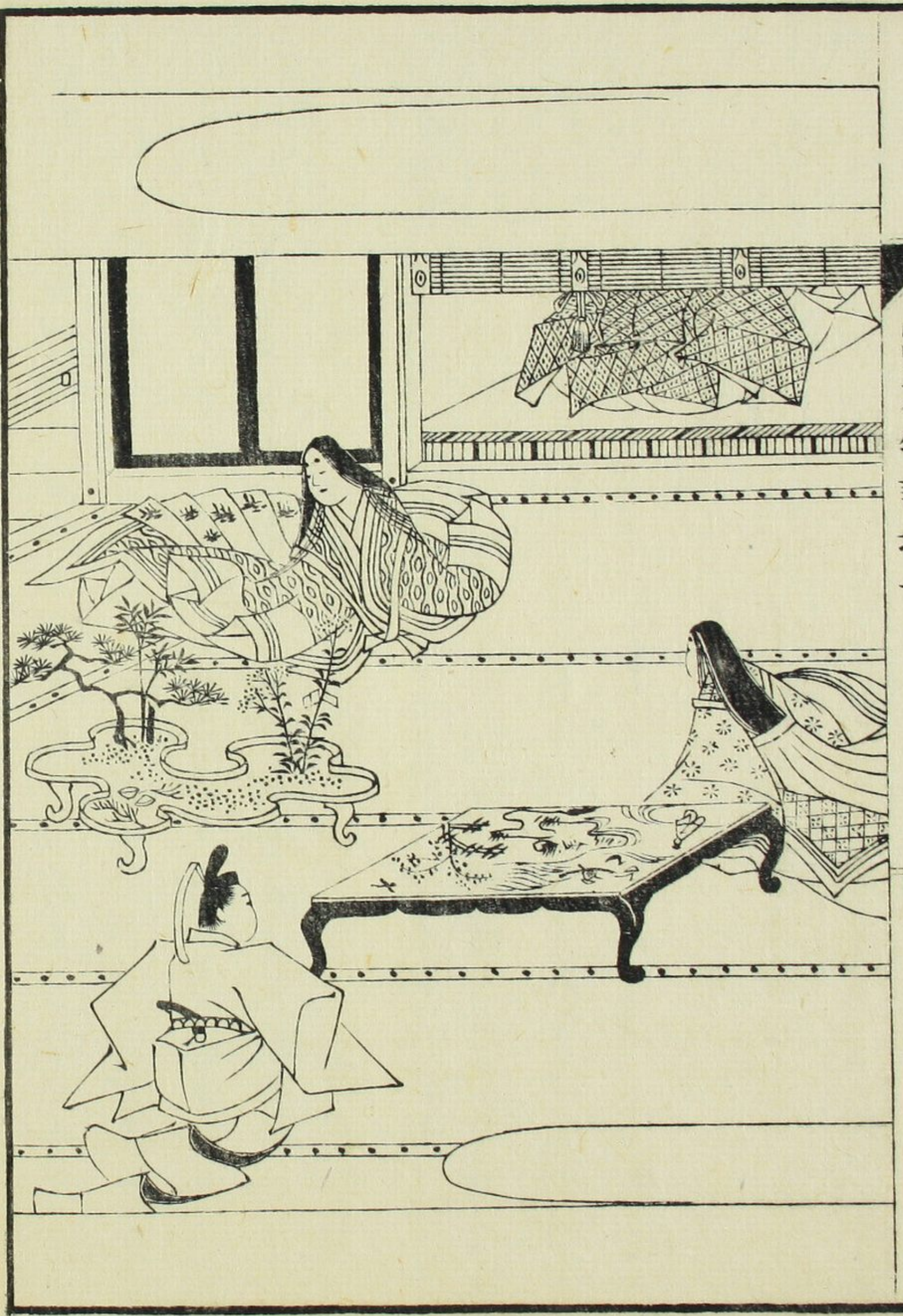
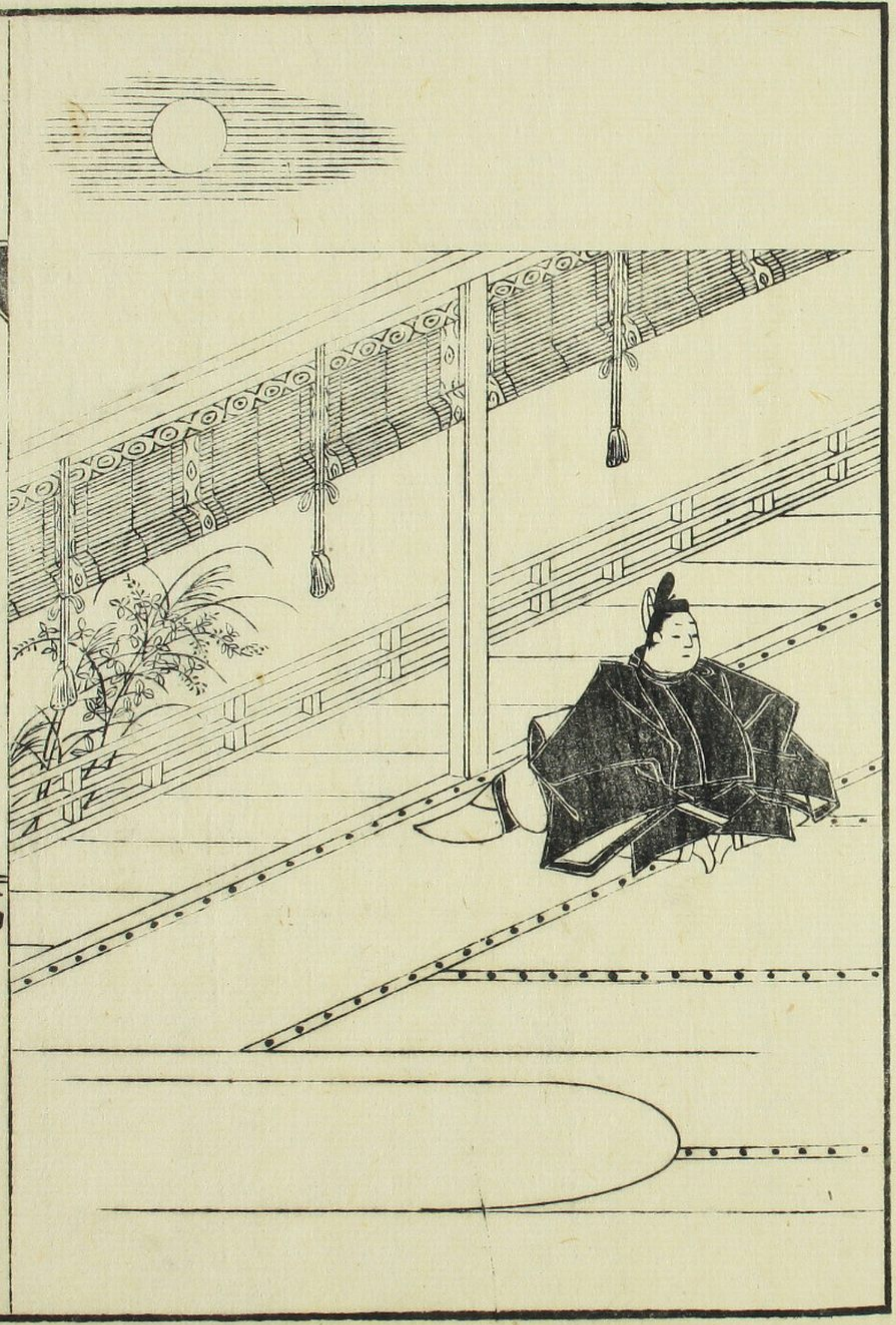
と弾給ふふこそと宣ふふせんころなくあやう思  
さまてともかくも宣らせぬ程いと恥かきげなり其  
折ふあさましう思さまたりける御氣色此世がより  
ふなりたるなるをいふ

はらちう年月も過ぎて、<sup>村上</sup>とせあらしめして後廿年  
ふなりぬを切りなばや暫し心不任せても在りふ  
しがなと思し宣はすもど時の上達部たち更ふゆる  
し聞えさせ給はんとて、清涼殿の御前ふ皆方わかちて  
宴せさせ給はんとて、康保三年八月十五夜月の  
前裁うゑさせ給ふ左の頭より繪所別當藏人少将濟  
時とあるは、小一條の師尹のおとどれ御子、今の宣耀  
殿の女御芳子の御せうとあり。右の頭に作物所の別當

右近少将為光、是は九条殿師輔の九郎君なり。劣らど負け  
じと掘をかはして、繪所の方より沙濱を繪ふうきとて、  
種々の花おひくるふまきうてかきたり。やり水岩は  
皆かきて、白がねをませれ形ふくゆるづの虫どもを  
まませ、大井に逍遥志たるかきをうきて、鶴舟ふか、  
り火ともしたるかきをかきて、虫の側らふ歌を書き  
たり。造物所のかきよ、面白き沙濱をゑりて、志ほみ  
ちたるうきを作りて、色々のつくり花をうゑ松竹な  
どをゑりつけて、いと好もしろし。かきもども歌をい  
女郎花よぞつけしる。

左方 君がたは花うゑそむと告ねども、

ちよまら虫のねよぞたのそねる。





右方 ころろして今年いふほど。女郎花、

さうぬ花ぞと人の見るとも。

御祿 布帛装束の  
類まんと法后小嶋  
さまむ料を云ふん  
子のええあり何  
ずおつけても眼お  
るをいふ俗おまを  
えのあること

ち修法あま壇  
一壇に一體づの  
佛をたじて祈禱を  
るをいふ五壇七壇  
など時およりさま  
ぎまなり

御遊ありて、上達部多く参り給ひ、御祿さまもななり。  
是おつけても宮のおはしまし、折に、いそしく事れ  
をえありて、をうかりいやと、折に、いそしく事れ  
上達部たらえひ聞え目拭ひ給ふ、花蝶よつけても、今  
いたおありるなばやとのみぞおぼされり。時々おつ  
けてかはりゆく程、月日も過ぎて、康保四年ふたり  
ぬ、月頃内お例ならび悩一げと思ひ、多して御物忌な  
ど繁し。いかよとのおそろしう思しめす。御讀經御修  
法などあま壇行もせ給ふ。かきととさらし験しも  
なし。例の元方の霊なども参りていみじくの、

元方の霊云々 元  
方大納言いささ  
我女のうめる一の  
宮をおきて二の宮  
を東宮ふをえられ  
しをいひ恨みて  
失せしるの祟りを  
なまふしく  
世の盡きぬればこ  
そ 天位を保ち給  
ふ教つきて、西蔵威  
の衰へたれば、や  
と  
さざれ さもら  
であれこ  
今おおきていえぬ  
給もじ 為平親王  
と源氏の高時の女  
を娶りて藤氏の後  
えなるも、帝位お  
いにかがと、さ  
藤氏の威勢をさ  
登子  
内侍のうと 登子

み、猶世の盡きぬをこそ、かやりの事もあらまこと、心細  
く思ひめさる。かねいおりさせ給ひ、まほしく思さ  
ましかど、今ななりては、さばれ同ど、位ながらこ  
そと思さる。御心ちいと重けま、小野宮のお  
ご忍びも奏し給ふ。もい非常の事もおはしまさ、東  
宮ふい、誰をかと御氣色賜り給へば、式部卿の宮を  
とこそ思ひ、かど今おおきていえぬ給も。五宮を  
あん然思ふと仰せらる。ばうけたまをり給ひぬ。御  
悩實小いみじく、けい宮達御方、皆涙を流し給ふも  
おろろなり。其中も内侍のかみ、あられふ人やら、  
れ、やと思ひ、歎くさま、理りふいとほしげなる。され  
どつひ、五月廿五日、又失給ひぬ。東宮位、つかせ給

康保四

ハ安子中宮の妹小  
て始り重の初王の  
宮とあり頼朝も中  
宮も失せ給へる故  
入内して帝の珠お  
あられとお召され  
り

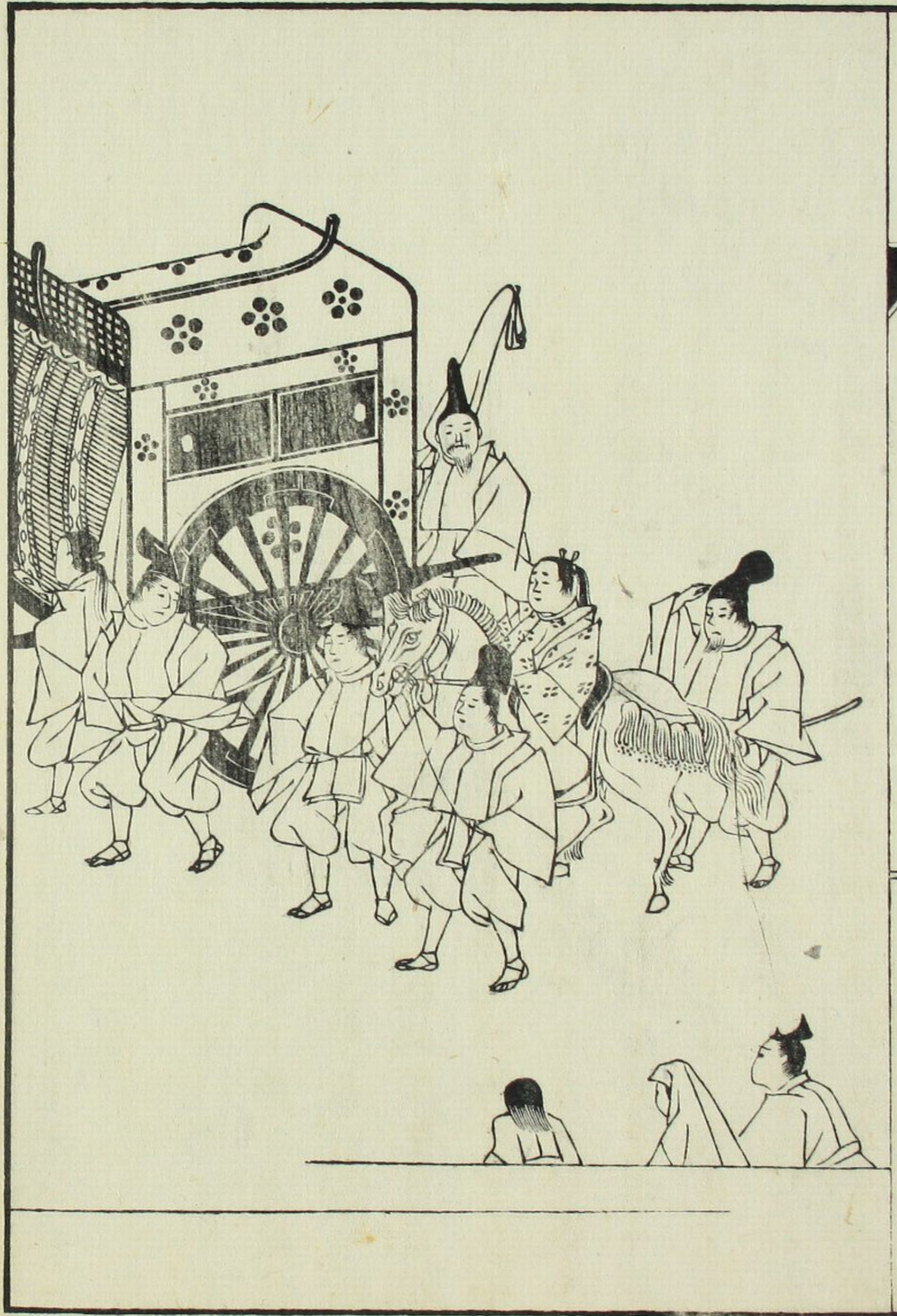
是摺と一つ云々  
小史のほく時こ  
の状をなまことあ  
り

ふ。哀ふ悲しき事譬へん方なき。めでよう照輝きたる  
月日の招もて又むら雲の俄又出来て、掩ひたるよこ  
そ似たれ。又九重の内のももし火をか消ちたる  
やうも有り。あさましういふとも世の常なり。こ  
ころの殿上人上達部たち、是手を惑わしたり。我君の  
御やうなる君より、今いあひ奉りなむや。我も後れ奉  
らじくと、是摺を一つと泣給ふ。

今年ハ安和二年とぞいふめるよ、位<sup>冷泉</sup>まで三年ふこそ  
いならせ給ひぬれば、いかあるべき御有様よのとれ  
み見えさせ給へり。かゝる程ふ世の中といとけしうら  
ぬ事をぞいひ出でたるや。それハ源氏の左の招<sup>高明</sup>とぞれ  
式部<sup>為平</sup>卿の宮の御事を思へて帝<sup>冷泉</sup>を傾け奉らむと思へ

佛神の馬のりしや  
云々 佛佛の加彦  
のゆるみふらま  
ことよ赤心のうち  
にさるけしならぬ  
隠謀ありつらむ  
露顯せしと  
檢非違使云々  
れハ非違法を檢  
一退捕死断を掌る  
職よて今の警視の  
こときもの  
太宰権帥 太宰府  
ハ元<sup>二</sup>高と智<sup>三</sup>権帥  
ハ左還せられしハ  
府政ハあづららぬ  
網代車 爲平  
たい速行などり

かまふといふ事出来て、世といと聞きみく、のちなる。  
いでやせふさるけしうらぬ事あらじなど、世人申思  
ふ程ふ、佛神の御ゆるしや。げと御心のうちにも有  
まじき御心やありけん。<sup>安和二</sup>三月二十六日ふ、此左大臣殿  
ふ檢非違使打圍みて、宣命讀之のちりて、みかどを傾  
け奉らむと構ふる罪ふよりて、太宰権帥ふなして流  
し遣ひはといふ事を讀みのちる。今ハ御位もたささ  
ぢやうなまむとて網代車又乗せ奉りて、たがいきさり  
るて奉つとも、式部<sup>為平</sup>卿の宮の御心ち、大かこならんふ  
てだふいみどと思さるべきふまいて我が御事ふよ  
りて、出来たる事と思すよ、せん方なく思さきて、はさ  
もくと出立ちさわがせ給ふ。<sup>師輔女</sup>北の方御む<sup>為平室</sup>は男君た



用ゐる車なり  
 大かぢならむらて  
 びよらゝ 普通の  
 予あてゝいかに  
 かるゝとふか  
 我身のより起り  
 一厄難あればと  
 菅原の御  
 其公延喜元年正月  
 廿五日太皇太后の  
 左殿せられしと  
 人の志るふこ  
 冠など給へる  
 元服あるといふ  
 悲しいみどき  
 めいかなる人の云  
 云 世よは悲し  
 惜まるゝ人の死ま  
 を例あらずあれど  
 これいなきながら

あいつをとおろなる殿のうちの有様なり。思ひやる  
 屋しむかし菅原のおととの流さも給へるをこそ世  
 の物語不聞し急し。か。こまいあさましういとどき  
 めを見てあさま感ひく皆泣駭ぎ給ふも悲し。男君た  
 ちの冠などし給へるも、後をじくと感ひ給へるも、敢  
 へて寄せ付奉らば。たゞ有るが中兄弟ふて童なる君  
 れ殿の御懐はなを給えぬぞ、泣きの、志りて感ひ給  
 へた、事の由奏して、さばれそれいとゆるさせ給ふを、  
 同じ御車ふてだよあゝば。馬ふてぞおとす。十一二  
 をりりよぞおはしける。只今世の中は悲しいみどき  
 とめしよある人の、なくあり給ふ例の事なり。これハ  
 いとゆる、志り心うし。醍醐の帝いみどらうさううか

あつぞゆるしきと  
一の三こ 一本  
不侍の字なりしもの  
て磯碓の弟す  
みして長子みあら  
び公卿補任小第一  
源氏とあれはは文  
いとのどの侍子弟  
一の源氏とありし  
が持例せり

こころをむせび  
水草のまがりき  
うらみせし  
心ゆらぬ 心ふ  
満まきげ氣のま  
ぬ

くれ闇よて 目も  
くれ心も闇よほき  
給ふ

いきながら身をか  
へて 死もせむ  
栄枯の境をわか  
へるが如しとあり  
弟の女君は 古  
ハ妹のうで弟と  
ゆいへり十五の宮  
の侍子もおとせぬ  
かより養ふれど  
後小道長の守り  
なりとの松のうへ  
いふ

事限りあるもの  
寺在位の程も天教  
あるものやと

しこくおをしまして、ひぢりの帝とさへ申しきと  
の御一の三こ、源氏となり給へるぞかし。うくる御有  
様ハ、世又あまき悲しう、心うき事小世又申しの  
の志る。式部卿の宮法師にやなりなましとおぼせど  
稚き宮たちのうつつうておをします。おほ北の方  
の世をいみじと物又おほいたるも、只今ハ宮一所西宮ナリの御  
蔭よのくも給へれば、えり捨てさせ給ふ。いみじ  
う哀ふ悲しとも世の常なり。住ませ給ふ宮内もよ  
ろづおほぼし埋まれば、おまへの池やり水もみくさ  
るむせびて、心もゆかぬ様なり。さあぐみさばかり植  
ゑあつめ、つくるはせ給ひし前栽植木ども、心り任  
せて生ひあがり庭も浅茅か原小なりて哀よ心細し。

宮を哀ふいとしと思しめしたるう、くれ闇よて過さ  
せ給ふにも、昔の御有様恋しうて、御直衣の袖も絞  
阿ふさせ給ふ。いきまづ身をかへさせ給へるぞ  
哀ふかたじけなき。源氏のお高明の有るが中の弟の  
女君の五六むり又おはするハ、おととの御はらか  
らの十五盛明の宮の御むまめもおはせざりけむ、迎へ  
取奉り給ひし、姫宮よてかしづき奉り給ひし、養ひ奉  
り給ふ。そまうつけてもいと哀れなるものハ世なり  
けり。そち高明殿ハ法師ふなり給へりとぞ聞ゆ免る。そこの  
あく月日も過ぎて、事限りあるものや。みかど冷泉おりさせ  
給ふとてのしる。安和二年八月十三日なり。みくど  
おりさせ給ひぬ。東宮らるる小即せ給ひぬ。御年

十一なり東宮ふおりのまかどの、御子のちご宮る  
させ給ひぬ。

かゝる程り、かの村上の先帝の御男八宮、宣耀殿の女芳子

御の御腹の御子ふおるも、いと美しくおはしま

せど、あや志う御心をへぞ心得ぬ様ふおひ出給ふめ

る。御をおの濟時の君、今の宰相までおはるぞ、後

づお扱ひ聞え給ひく、師尹ノ家小一條の寢殿ふおはるる、此

宰相ハ、枇杷の大納言延光の女もぞまゝ給ひける。延光室母

ハ中納言敦忠の御女なり、えもいと俊うつくしき臧子姫

君さづけものふしくわしづき給ふ。かの八宮ハ、永平母女

御も失給ひましうバ、此小一條の宰相のみぞ、よろづ

ふ扱ひ聞え給ふふ、まだをさなう程は、おはるまじき、此

志心ぞ心得ぬ  
さまふ云く 傍心  
のちろりくま  
し給ひまふ

煩くしき程ふ  
るまき程ふとい  
んが如し

八宮いと煩くしき程に思ひ聞え給へば、ゆくまう  
てあへてみせ奉り給ふはなりふたり。をさなまき程ハ  
うつくしき御心なり、うさてひがくしく志まばみ  
て又さすがふかやうの御心さへおをするを、いと心  
づきなしと思しけり。濟時宰相の御甥の實方の侍従も、此  
宰相を親あし奉り給ふ。此臧子姫君の御兄あて、男君ハ長  
命君といひくおはる。お延光室北の方取放ちて、枇杷殿ふ  
てぞ養ひ奉り給ひける。其君達も唯此宮をぞめて笑  
ひぐさう志奉り給ひけきバ、ともすれば打ちひそみ  
給ふをいとをこがましき事、笑ひ奉り給へるふ  
にくさは姫君をいとめでたき物、見奉り給ひて、常  
ふ参り寄り給ひけるを、宰相むげよ心づきなうと思

心づきなう 心よ  
ままぬうく免ふ

くもぬといふ俗語  
みある

さりとてさきげん  
さりとてさきげん  
いひささかた

なりふけり。この八宮永平十二ばかりみぞなり給ひふ  
ける。此御心ぎまの心えぬ歎きをぞ、宰相濟時いみじう  
思いたる。實方侍従長命君など集りて、馬実方寺詞のりなら  
はせ給へ。乗らせ給をぬいとあき事なり。宮達は  
さるべき折こい、馬よてこそありかせ給へとて、御馬  
屋の御馬召出で、おまへよてのせ奉りて、さりとてみ  
ささげば、おもていと赤くなりて馬のせなまかよひを  
ふし給へといみじう笑ひのたまふを、宰相濟時うはら痛  
まとおぼはれ、抱きおろし奉せ。おそろしと思すらん  
と宣へば、さうや笑ひのしりて抱きおろし奉りたまは  
馬のかみを、一くちくくさくおはするを、宰相濟時いとや  
むしと見給ふ。女房たちなど笑ひのしる。うらむ程よ

さりとても云々ハ  
宮の侍心へせし  
いかにの様おまゆ  
れど宰相の教育も  
あれはこの上をか  
うらむと云

こくべうかきも云々  
昔の髪をきとてめで

冷泉院の后昌子の宮、みこもおはしまさばつむぐなるを、  
此八宮永平子よ志たてまつりて、通をし奉らんとあんな宣  
はするといふことを、宰相濟時傳へ聞給ひ、いと嬉宰相詞  
りめでたき事ならん。かの宮昌子は、たからいと多くもた  
せ給へる宮昌子なり。故朱雀院の御寶物、たゞ此宮よの  
まこそいあんなれ。此宮永平は、幸おはする宮なり。だから  
の玉みなり給ひあむとすとて、よき日して参りそ免  
させ給へり。中宮昌子さりとてかの宮、小一条の宰相濟時を  
へ立たらむ心のほど、こよまからんと思へて、逆へ奉  
らせ給ふ。宰相濟時いみじう志たて、あて奉りたまへま  
ば見奉り給ふ。御かこちよくげもなし。御ぶしなど  
いとをかくげみて、よぶらばかりおはしまは。うつ

必承たれ物語抄一

たきまむあさりよ  
おろハ胸をこ脛の  
うらのふくをころ  
をほじとつふこと  
とし  
御直衣 なほしハ  
襦ありて形袍ふ似  
たり朝服ふつと衣  
ふて貴紳の常服を  
りたる人いゆるし  
とゆてきる定めこ  
かつげもの 衣服の  
扱ふともふか  
づけ賜る料と

くしき御直衣すかたなりや。やがてふび入奉らせ給  
ひて、南抄もての、ひのおましの方まかしづきすゑ奉  
らせ給ひ、御ともの人くふ、かつげ物ままひ、御おくり  
物などしてかへし奉らせ給ふ。ものなど申させ給ひ  
けるにすべて御いらへなくと、たゞ御顔のま赤みけ  
もを限りなくあてま、おほどかよおまはるあめりと  
思ほしけり。其後とも参り給ふ、猶も此のたまは  
ば、あやちう思しめ、以程、昌子后の宮悩ましうせさせ給  
ひけま、濟時宰相宮の御とぶらひよ出たて奉らせ給  
ふ。参りてはいうづいふをきとのたまはすま、宰相詞御な  
やみのよし承はりてなむ。ところを申給をめ。なご教  
へられて参り給へれば、例のふびいも奉り給ふに、あ

ささ さらばの殿

あながま 瘧が  
まよておろし  
きさしふ

ついでちよこ  
月元日の参賀

りつる事をいとよく宣はすま、昌子宮悩ましうおほせ  
どうつくしう思しめして、中宮詞さばのどか又おはせよ。  
なご聞えさせ給ふ。まかで給ひ、濟時宰相ふありつる事  
いとよくいひつと宣へば、いであな忘れがましや。い  
と心づまなう思して、宰相詞いかでいひつとを申給ふぞ。お  
まいかたどけあき人をと聞え給へば、八宮詞をいささなり  
さなりと宣ふ程、いたをり所なう、心うく見えさせ給  
ふを、昌子まびしうおほす程、天禄三年ふなりぬ。ついた  
ちふま、永平の宮御さうぞくめをたく志たて、昌子宮へ参  
らせ奉り給ふ。聞え給ふをき事を此たびい忘せて教  
へたてまつり給はずなりふけり。昌子宮は八宮参らせ  
給ひ、御まへして拜し奉り給へば、いらくあはれよ

うるこり 端  
とかきて行儀よき  
意なり今の美無  
るをいふこと

うつく〜と見奉らせたまふ。心こ〜と〜御禱たごま  
ありさるべき女房達など花やかよさうぞきつ〜出  
みきいらせ給〜と申せむうちあるまひ入らせ給ふ  
程い〜うつ〜しけむあなうつ〜やなごめで聞  
ゆる程よ、禱ふい〜う〜は〜く〜るさ〜せ給ひ〜何ごと  
を聞え給ふべきふかと、集りて扇をさ〜隠〜つ〜、押  
こりて皆居なみてが女房詞つゝいあな恥かしや。小一条の姫城子  
君の御かこのいみドからんものをなど聞えあ〜る  
程に。うちこわづくりて、申いで給ふ事ぞかし。いとあ八宮詞  
やし。御悩みのよし承はりてなん参りつる事と申給  
ふものか。こぞの御なやみの折ふ参り給へりし濟時ふ、宰  
相の教へ聞え給ひし事を正月のついたちの拜らい





そなたあく 不粘  
合ら思ひがけを  
いともつきなうし  
由はまへき詞  
こぞの所心地 寺  
心地との病氣のこ  
と

むづかりて むづ  
かしく思ひて怒る  
ふりこ

ふ参りて申給ふなりけり。宮の御前あきれて物も宣  
はせぬ。女房たち何とあくさと笑ふ。世語りも志  
つづき宮永平の御言葉うなとさゝあき忍びもあへず笑  
ひの志をばいとはしたなく顔赤みせる給ひて、いなや  
をぢの宰相濟時の、こぞの御心地のをり参りしかばかう  
申せといひし事をけふいへば、なごこれがをかし  
あらん。物笑ひいへうけける女房たち多うりける宮  
かな。やくち参らんとらちむづかりてまかで給ふ  
有様あさましうをかかうなむ。小一条濟時家は招はして、あ  
さましき事こそありつれと語り給へば、宰相何事よ  
かと聞え給へば、今昌子家の宮よすべし参らじ。たごころ  
ふころされよと宣ひすれば、いなやいかふをぐりつ

いさう 此後  
得まつらうと其し  
うといふらんが如  
く、いさあき  
あつきの其し  
ささりこ

花山たづぬる中納言  
言 此表をかく名  
づけしは花山院あ  
る給ひそらう花山  
ふおとて判髪  
捨ひしを叔父の  
義懐中納言尋ね  
参りて共入道し

る事ぞと聞え給へば、御悩みのよし承はりてなん参  
りつると申つれば、女房の十廿人と出居て、ほくと笑  
ふぞや。いとこそ腹たぐりかりつれ。されば急ぎ出で  
きぬと宣へば、殿濟時いとあさましういみと思して、す  
ぐ物も宣へば、いなやともかくも宣はぬ、まろが  
あういひたる事か。こぞ参りよとさ申せと宣ひ  
らば、それを忘れ申たるいづくの悪しきぞと宣  
ふを、いみじとおぼし入ためり。

二 花山たづぬる中納言

天元四年ふなりぬ。みごと御心のうち御願をどや  
おぼしましけん。賀茂平野などみ、二月ふぎやう幸あ  
り。みこの御祈りなごよこそはとごまはり見えさせ

給ひらぬと云ふ  
山科御あり元慶  
寺といふ  
賀茂平野 賀茂  
社と山城國愛宕  
郡あり平野社も  
同國高野郡に  
いふでおりなん  
いかゞもしくて帝  
遊位あらまほし  
と云

おと我が一の人  
ふあらぬと云  
兼家と云兼通と  
不和なりしが帝兼  
通の奉まらまらに  
程忠と実自太政大  
長又任じ給ひて重  
家関白を譲られ  
ぬと不快も由ふ  
也  
なまつまら  
何となく憚り多き

給ふ。みろと今いみこも生色させ給へり。いかゞおりな  
んとのみ思し急がせ給ふ。梅壺詮子兼家女の女御の里がちふお  
としまはを安からぬ事又うへ思し免せと招し兼家がわ  
が一の人ふあらぬを、何かはなど思しめはなりけり。  
堀河の招兼通と招はせし時、今の東宮師貞の御いもうとに  
女二宮尊子参らせ給へり。いはいまじうつうしうも  
て興じ給ひしを参らせ給ひく程もななく、内など焼け  
に、かば火の宮と世人申思ひたり。程ふいとばか  
なう失給ひふ。ななん。圓融みかど招はき招頼忠ととの御心  
ふたがはせ給もじと思しめして、この女御遵子后又すそ  
奉らんと宣はすきと、お頼忠となまつまらしうて、一懐仁  
みこ生色給へる梅壺詮子を置きて、此女御遵子のゐ給えんを

と云

梅壺詮子今とあり  
ともくありとも  
家の女兼家を  
生五給へるなれば  
今こそ所もな  
と崇められんこと  
必せりと云

さし出給えど心  
ふ不平なるあり  
て世間の交際を絶  
てらるる  
一品兼家の世ふいふ  
初まは世間兼家  
不平なるからに女  
侍も打とけ給えぬ  
なと風説まると漏

世人いうよかえい思ふべからんと人がたきはと  
らぬこそよけれなど思しつゝ過給へば、なとてか、  
梅壺詮子の今はとあまともうりとも必の后なり。世も  
定ちさふ、この女御遵子の事をこそ急がせめと、常又宣は  
せも嬉しうて、人知れぬ思し急ぐ程ふ、今年もたち  
ぬまはくちをさう思し召す。かゝる事ども漏り聞え  
て、右の招兼家と内小参らせ給ふ事かたし。女御詮子の御は  
らからの君達なども、まいてさしいで給へば、女御詮子も  
心とけたる御氣色もなけき、一品資子の宮兼家の世ふいふ  
事をより聞給ひて、さやうふ思したるよしを、世を心  
づきなく思し聞えさせ給ふべし。はかなく年もかへ  
りぬ。正月天元五小庚申出来たも、東三條殿兼家の院冷泉の女御起子の

れき給ひてげさ  
 さもあらんと思し  
 めまゝと  
 庚申申されい  
 庚申の物お寐る  
 時ハ三アといふ中  
 人身中ふ入りて病  
 さらのまゝといふこと  
 こそは物のおきる  
 ることハ院の風俗  
 ありき  
 こたゝかたゝか  
 兼  
 家の女御ハ冷を  
 の女御とちう妹ハ  
 中宮の女御とちう  
 殿中ハ位めり  
 冷泉院ハ位めり  
 こそとちう兼  
 院例の不快なる  
 あらとちう兼  
 中宮とちう兼  
 さまゝと思は  
 御殿ごもり  
 あり  
 かち寝所はとも

御方より、梅壺益子の女御の御方より、若き人々年の始め  
 の庚申なり。せさせ給へと申せばさばとて御方より  
 なせさせ給ふ。男君たち、この女御達の御をらうら三  
 道兼道長所兼道長をおもしませ。いと興兼道詞ある事なり。いとよし。こなた  
 かなたと冬らん程又、夜も明けなんあど宣ひて、さま  
 さまの事どもして御覧せさせ給ふ。歌や何やと心  
 ばへをかしまし。御うづくの有様よりはじめ女房たち  
 碁すぐ六の程の挑みもいとをうしくして、この君たち  
 のおはせざらまゝか、今よひの眠りさまゝいなか  
 らまし。など聞え思ひく、たひぐ鳥も啼きぬ。院起子の女御  
 あかつき方小御脇息おしかりておはします。すま  
 よよ、やがて御殿ごもり入りふけり。今更ふなど人々

らども只も寝  
 をうけい  
 たらおどろかし  
 させ。おどろ  
 とも呼ひ醒ませ  
 をいひ驚かせし  
 むるふいむらむ  
 せえとい申まとい  
 ぬにおや  
 やいものけたま  
 る。やいひ  
 なりもの伺ひ申さ  
 んといふ詞  
 大とながら 大殿  
 神の約語を燈臺  
 のことなり

聞えさせませば、鳥も啼ぬまゝ今いさばれ。なにおどろか  
 しきことえさせせをなど、人々聞えさせませ。はらなき歌  
 どもさせさせ給へんとて、此男君たち、やいものけ  
 たまゝ。今更ふ何の御殿ごもる。起させ給へんと聞  
 えさせさせませ。御いらへもあくおどろさせ給はねむ  
 しまてやいときこえさせ給ふ。ことの外不見えさせ  
 給へま。ひきおどろけ奉り給ふに、やがてひえさせ給  
 へればあさましくうて御となぶら取寄せ、見奉らせ  
 給へま。失せさせ給へるなりけり。あなあさましくやと  
 も、いひやらん方なく思させ。殿兼家ままづかうの事  
 候ふと申させ給ふ。まゝ物もおぼえさせ給はで  
 惑ひおはしまして、見奉らせ給ふ。あさましくいみ

とよみて 殿の  
ちひききりうて  
さきふりうて  
御誦經所ふまら  
せ 佛祈禱の誦經  
せさせんとあふ所  
この寺に使者を  
まらまらこ  
向き陵の寺ぞ 侍  
ぞい侍衣のことこ  
白綾の小袖四つを  
うりの上へ紅梅の  
袴を着給へるに  
扱ひ奉り重紫ま  
十月より二月迄の  
御着用する例あり  
宮達のいとをさふ  
く 冷泉院の皇子  
さちふて母女御と  
共小兼家の殿う  
養われておとせ  
る

じけきべ、抱へてたゞあしまろび感はせとまらふ。殿の  
内とよみくのしりたり。さびき僧ども召しのく志り  
ふろづの御誦經所よりま走らせ給へども露かひなくてこ  
きふせ奉らせ給ひつ。向き綾の御ぞよつばあり又、こ  
うばいの御ぞばかり奉りて御ぐし長くうつくしう  
て、かいそつと伏させ給へり。たゞ御とのごもりたる  
と見えさせ給ふ。殿兼家いみじう悲しきものと思ひ聞え  
させ給へれば、唯思ひやるべし。宮達のいとをさふく  
おとしまはなごふろづ思し續け感はせ給ふ。冷泉院  
小聞し召して、あさましう哀れ心うき事と思し召せ。  
猶これか、かの御ものけの志つるとぞ思されける。ふろづ  
御帛ひまつけてもいとあやふく思し感はる。ゆ

かの御ものけの  
云い かく、越子の  
頓死もえ方の怨靈  
のまらさざりしん  
後くの御うども  
理華後七日の徳春  
を始り中陰の法  
ども例の通り扱  
ふりこ

其子とあるおとせ  
巧れ くれと死者  
の病に特あつた  
件あるおとせを  
もせり普通の事  
いかりで返さま  
ら

ゆきき事どもなれどすべてさづりおはしますと見  
えさせ給ふも悲しういみじう思さるれど、さてのこ  
やいとて、後くの御事ども、例の作法おぼしおきて  
させ給ふまつけても、殿兼家只涙おぼほとてぞ過ぐさ  
せ給ふ。あさましうはかなき世ともおろり也。  
かゝる程小年跡もかはりて、永觀元年といふ。正月よ  
りはドめ事ども、世の常より過ぎもてゆく。其こと  
とあるをりこそあは。はかなく月日も過ぎもて行く  
ふ、若宮を心安くもあらば、もてなまし聞えさせ給ふを  
内圖融ふもいと苦しう思し召すべし。今圖融はいかでお  
りなむとのこ思さるうち又御ものけも怖ろし  
う志げうおこらせ給ふも、冷泉院の猶例の御心い

つかさかうぶら  
つこのまゝ年古ま  
かうぶら年古ま  
り年給とひひて  
三宮まゝ唯三宮の  
うぐく小の年々特  
小爵後五位下官  
國司の福ふある  
俸祿と給もるる  
なり  
七月まゝいひも近  
かれば相撲の御  
ハ七月廿五日より  
始る主上馬覽あり

まゝなごころあきましくしてのこ過させ給ふふはかな  
くて永觀二年小なりぬ。ことしだよ必と思し免して  
人志をばさるべき様小思し免さるべし。東三條のお  
兼家  
と、たはやすく参り給はぬをいとあやしうのこ思  
しわさる。梅壺證子の女御の御もともも、猶若宮懷仁のおほん  
いのり心ことよせさせ給ふ。かくてさるべきつかさ  
かうぶらなご多くよせ奉らせ給ふ。時々の事ども、を  
のなく過ぎもて行きて、七月すまひも近くあれば、こ  
を懷仁若宮不見せばやと宣もれどおとく少しふさ  
はぬ様にて過させ給ふよ、度くお兼家とゞ参らせ給つと  
内より召しあきとみどり風などさままぐの御障りど  
も申させ給ひつゝ、参らせ給はぬをままひ近くなり

公卿陪觀と母年  
定まれる流るる  
武の一端なり  
ふさこぬ 不同  
なる由  
まゝなり 今の感  
冒ふらうらふら  
ことし十六年安  
和二年也即位より  
ことし永觀二年  
まづとつ

て、類り小参らせ給へとあきま参り給へればいとこまや  
か又御物語あり。位帝詞につきて今年十六年小なりぬ。今  
まであべうも思はざうつとど月日の限りやあらん。  
かく心よりほろふあるを、この月はすまひの事あま  
バ、駭がしうるべけを、来ん月ばうりとなむ思ふを、  
東宮位師貞不つき給ひあば、若宮懷仁をこそハ春宮次小はすゑ  
めと思ふ又祈り所くよよくせさせて思ひの如くあ  
づう祈らすぞし。おろかならぬ心のうちを知らで、誰  
誰も心よからぬ氣色のある、いとくちをき事なり。  
あまたあるをだふ人、子をばいみどき物よこそ思  
ふなと。ましていかでかれろか又思をんななどよろづ  
有るべき事ども仰せらる。承はりて畏まりてまかど

ささく さや  
くふ同じ私語を  
るなり  
曆書覽じて曆  
をりつま辰を  
ま  
かろくと宣ふ  
ねと云い殿  
慶事の披露  
そなふれん大  
うの推量たる  
さまめでさき

給むて女御殿もものさゝ免き申させ給ひて、おほん  
となぶら旨よせて、曆御覽じて所々に御祈り使ど  
も立騒ぐを、かろくと宣ふせねど、殿の中の人々氣色  
を見て思へるさま、いふもおろのよめでさき。此家の  
子の君達、いさうえもいはぬ御氣色どもなり。さて  
ままふなどども、此君たち参り給ふ。おとづの御心は  
うちもいさうて交らひせ給ふ。かくて八月永観二ふなり  
ぬも、廿七日御讓位とそつある。其日になりぬれ  
ば、みづといおりさせ給ひぬ。官ハ位兼家又つかせ給ひ  
ぬ。東宮次又ハ梅壺詮子所生 懐仁の若宮兼家あさせ給ひぬ。いへば、れろの  
よめでたし。世いかうこそはと見え聞えたり。おりの  
のみ國駐うどの堀河の院兼家ぞおはしましける。今の花山の

御年かゝるおと  
ひさせ 花山  
こと一雨七十五  
ふなり給ふ

此姫君を云く為  
光の女御子の母ハ  
実朝の子の敷敷  
の女御を能き  
佐理妹なり其系  
左の如し  
實頼  
敷敷 佐理  
女為光  
冷らくその名ぢめ  
れ、父の母方  
共各族を上下  
の差別いづれ格  
段なるべき優劣  
ふあるべくもあら  
むこと

どの御年かゝるおとなびさせ給ひ、御心おきてもい  
みづういろふおとしまして、いつかときべき人々  
の御むすめどもを氣色だち宣はは。かゝる程、一條為光の大納言の御姫君實頼、志たろく参らせ給  
ふ。此姫君ハ、小野の宮のおとづ清慎公の御太郎敷敷  
の少將の御むすめの腹、男君女君とおとしける也。  
手かきれすけまさの兵部卿の御いもうとの君の御  
腹ありけり。父どのハ九條師輔殿の九郎君、為光ときこゆ。  
何事も劣り勝ると聞ゆべきもあらば、誰かを其け  
ぢめのこよなかりける。いとおどろく志きまでよて  
参らせ給へり。弘徽殿まませ給ふ。すべて是ハもろ  
もろよまさりて、いさうとさめき給へば、大納言為光い

ときめく 時を得  
しりし思ゆるをい  
ふ  
まゝいかよとも思  
ひなげくべし君  
宿のあつきい嬉し  
たれどそれなれり  
まゝいかなるも  
あらむとと思ひあ  
ざり  
かゝへのまかひく  
かゝらの女御  
よもよひ  
おろし〜まゝ  
ま〜ま

みづう嬉しう思へて、いとゞ御祈りせさせ給ふ。又い  
かふとも思し歎くをい。いとあま里さま悪しき御お  
ぼえふと、あまこの月日由過ぎもていけをがとつれ  
御かゝぐいとさまあしうかゝる事ハ今も昔も更ふ  
聞えぬ事なり。久しからぬもの也など聞きに〜みろ  
のろちき事ども多かり。かゝる程う、唯ならびあらせ  
給ひ又けり。いと〜いみづうはうたを御くゞ物も、安く  
も聞し食さば帝、まづ〜弘徽殿ふとの宣はまもたば  
御おぼえめでたけと為光大納言もかゝら痛きままで  
思えけり。三月よて奏し〜いで給えんとするまゝづ  
止免聞え給ひく、五月はかりよてぞ出でさせ給ふ。  
とろづ御慎も御里よて心安くと思す、今まで出

御つり 和名抄  
病類不擇食 和名豆  
と之文字鏡不昧子  
始兆也 豆波利とも  
あり

清くよ止めず  
吐きよとまをつふ

内務つらき 法服  
法膳を器等と掌  
る所なり

御筒を削らせ給ふ  
殿上の筒箱を

でさせ給はざりつるよ、かくいでさせ給ひく、手をこ  
かちてよろづよせさせ給ふ。始めハ御つりりとして、物も  
きこしめさざりけるよ、月ころ過ぐれど同じ様よ、つゆ  
物聞しめさで、いとどうやせ細らせ給ふ。いみじきわ  
ざよ思へて、よろづを感ひしのこす事なく祈らせ給  
ふよ、橋一つもきこしめしてハ、御身にともめず。あ  
さましう哀よ、心細げよのよ見えさせ給へば、為光殿の  
胸ふ花山ががりて、安からずうち歎きつ、あつかひ聞え  
給ふ。内花山よりも、御修法あまたせさせ給ふ。内藏つかさ  
たりよろづの物をもく運ばせ給ふ。よる夜中わりぬ  
御使の志げき、殿上人藏人も餘りふじびふたり。暫し  
もとゞこほるをば、御筒を削らせ給ふ。御かしこまり

昇殿法良の名注  
せも簡ありそれ  
名を削るハ昇殿出  
仕を止めらるる  
となく  
かしこまり 執勤  
を蒙りて恐惶謹  
懃ま由  
さても六位の亮人  
などい云 亮人の  
常不殿上侍して  
機密の文書服も各  
物をも取扱ふ職な  
り五位亮人六位亮  
人とありて五位ハ  
殿上人の各家中其  
者用を撰て補まれ  
ども六位亮人の地下  
人とも補まれば衆  
中のあるまもさま  
でいあらむと  
いとありらむや  
世間の例も似ざる  
と

あど、さまざざおどろけしければ、さても六位の藏人な  
ど、いとよしや。さるるを殿原の君達など、いと堪  
へ難き事、小思ふ存し。はかなき御菓物なども、かしこ  
よ、露かひなうきこしめさねど、まづくと奉らせ給  
ふを、大納言いとよつかすや、なごうち歎きつゝ過し  
給ふ程よ、せめておぼつらなく戀しく思ひ聞え給ひ  
て、たゞ宵の程とのみ宣ひすまこと、え思へたるぬり、女  
御もさすが又おぼつかなげと思ひ聞えさせ給へる  
に、大納言殿たゞひと日ふつかと思へ立ちて参らせ  
奉り給ふ。  
さて三日ありて出させ給ひなむとて、御迎への人々  
御車などあまごも、まづゆるし聞えさせ給はで、今一

おつらなく定  
かならむ心細きを  
うらめを、後  
み心のかくるをい  
ふ心死まる義なり  
御車 登車にて  
宮内にて、引  
く車より、衆人勅  
許ありて、乗用を  
るさゆす、い女  
侍懐胎の上、病お  
てさへあれ、登車  
して宮中を退出す  
る  
えいほく 西田あ  
るさゆす  
回ころ、はさても、ち  
りつる云々、これ  
迄、大ていなりし  
病ひを、此度の退出  
より、ま侍みなりし  
と

おと止め奉らせ給へる程よ、七八日不成りぬまは  
御慎みもよもく、よそは、いとしろめだとして、大納言  
いとまめやうし、奏し給へば、たゞ御暇ゆるさせ給  
ひくも、御車引出で、まかきさせ給ふまであさせ  
給へり。大納言哀よかたどけなう思されて、わが御め  
いぼくもめでたくて、様々御涙も出でけまは、ゆとし  
くて忍びさせ給ふ。なかくこりなく思されて、うへさ  
へ例のやうしもおをしまさぬを、女房たゞいとほし  
う聞えさす。一條殿の女御、目ごら、いさてもありつる  
御心ちよ、こたみ出させ給ひ、後ハ、すべて御ぐしを  
もたげさせ給はば、あさましう沈ませ給ひて、たゞ時  
を待つばかりの御有様なり。大納言なかくよろづみ



寛和元年八月

これこめて 侍屋  
を垂れこめて侍  
みあるこ

志願して出し入れ  
まて 昔ハ主上  
后ならでハ志願  
奉る多なし其外  
いづれも車車なり  
き

あれハ葬式も臨  
難く其ありさま  
をさすふさき給ふ  
悲しきこと  
雲霧をよてやまの  
給ひぬ 火葬の烟  
を雲の霧霧うと思  
ふまでして止む  
こと法はハ大か  
火葬の法ハ  
御佛經のいそぎ  
佛像を画き短  
文を画して供養  
する支度おつけて  
となり佛經の二字  
つけて讀むべか  
らぬ  
宮の女侍を云  
為平賀の女御  
ふて私微殿おき  
て所定ありしな  
れをのかり給ふん  
ふいひのなき奏  
まればゆこ一見し

惑はせ給へどかひなくしてはらませ給ひて八月とい  
ふふ失給ひぬ。大納言殿の御有様書きつけ給へども  
思ひやるべし。内花山もたをこめておはしまして御聲  
も惜ませ給はば。いとさまあしきまで泣らせ給ふ。御  
めのと達せい一聞えさすまじきと聞しるしけれず。哀ふ  
いみじ。一條殿為光又いさしてのそやはとて、例の作法の事  
ども、あしき聞え給ふもあさましく心憂し。めて出  
で奉るをりたどへ、后又なし奉りて、御輿にて出とし  
入れ奉りて、見奉らんとこそ思ひいか。うくやはと伏  
まろび泣らせ給ふ。内花山ふはさづき御心よせの、殿上人  
上達部の睦ましき限りハ、皆かの御送りよいだし立  
てさせ給ふ。わがうそふ聞く事の悲しさをかへむぐ

思へ惑はせ給ふ。夜一御とのごもらで思へやらせ  
給ふ。大納言殿ハ御車の志りふあゆませ給ふも、た  
倒さ惑ひ給ふさまいと。はてハ雲霧をよてやませ給  
ひぬ。内も外もあないみじ悲しとのこ思へ惑ふ  
程ふ、そちあり月日も過ぎゆく行きて、さづき御佛經  
いそぎおつけても、御涙ひるまなす。う花山ちよも此御い  
のほどハ、絶えく何きの御方々も、つゆまうのからせ  
給はば。宮の女御姫子をば、さやうふなど聞えさせ給ふを  
りあまご、御こち悩ましなど宣はせつづのぼらせ  
給はば。かくあは色くなど有し程ふ、もかなく寛和二  
年ふもなりぬ。世の中正月より心のとあらば。あや  
しう物のさとしなど志げうて、内も御物忌がちふ

つれまじく  
あやしうものさ  
と一 天変地異の  
前兆なりあるをい  
ふ  
いふことと道心お  
こして云々 佛道  
帰依の心を起す  
日本紀略に按ずる  
ふこと一寛和二年  
の春の程は資子内  
親王を系時子等ハ  
尼なり侍役相中  
大内記保胤盛時物  
を等に出家し給へ  
り名も知らぬ下人  
幾人のありけん  
阿闍梨 ころは伏  
して修行といふ後  
のこし  
妻子珍寶及王位  
大集經の妻を珍寶  
及王位隱念終時不

ておはしまは。又いひなる頃ふのあらん。世の中の人  
いみじく道心起して、尼法師になりはてぬとのみ聞  
ゆ。これをみかど花山聞かして、はかなき世を思し歎か  
せ給ひて、あまき弘徽殿低子いかも罪深からん。かゝる人  
いひと罪重くこそあめま。いかゝかの罪をほろぼさ  
むやと、思し亂るゝ事ども御心の中又あるべし。此御  
心のあやしう尊きをりおなく、心のどらならぬ御氣  
色をおほきおと頼忠思し歎き御をぢの中納言も、人知  
まびたど胸つぶきてのと思さるべし。説經を常に花  
山の嚴久阿闍梨を召しつゝせさせ給ふ。御心のうち  
の道心限りなくおはしまは。妻子珍寶及王位といふ  
事を、御口のたまふかけさせ給へるも、惟成の韓いみじ

隨身とあるを平  
當口のたまふかけ  
給ふこと

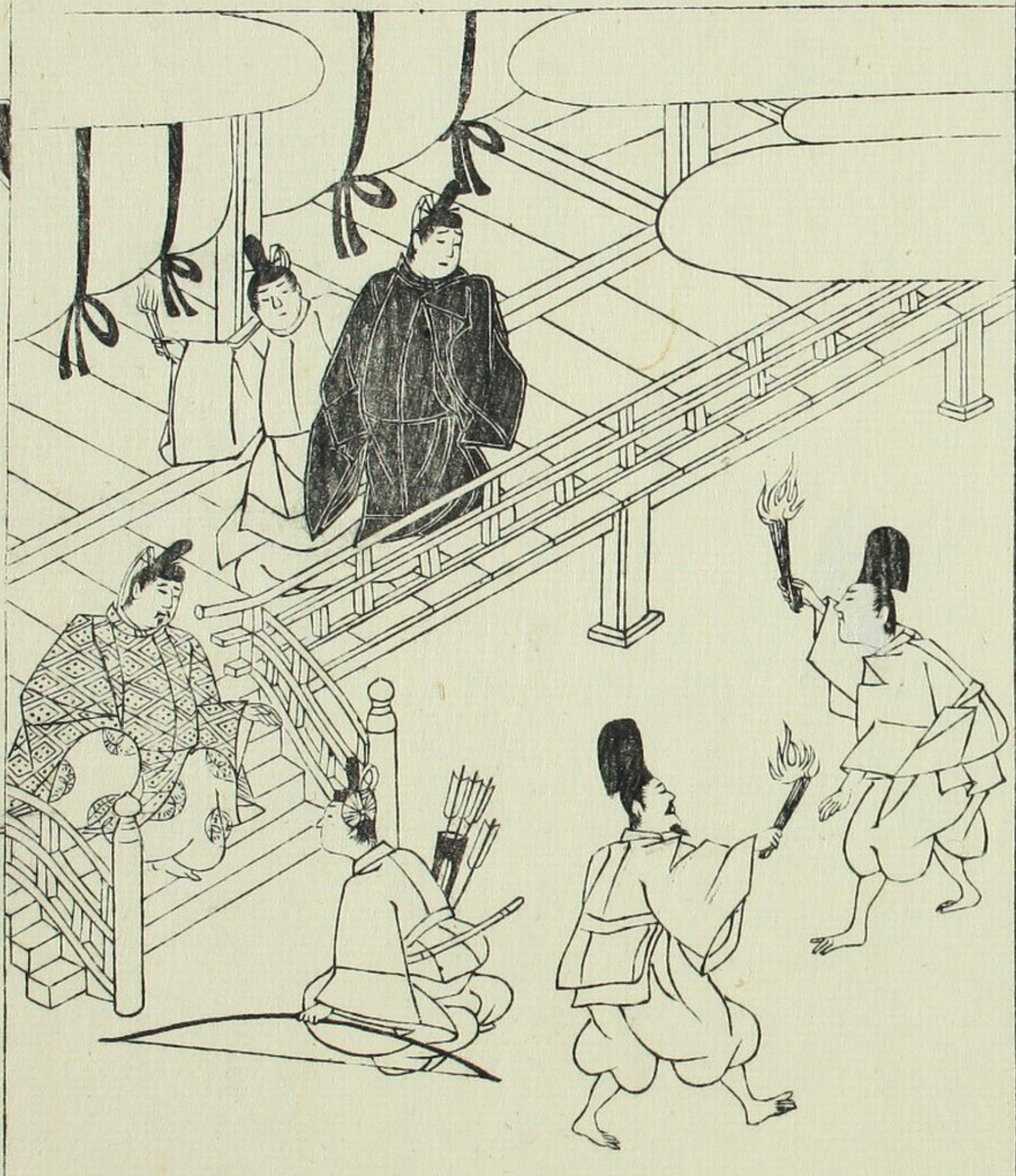
すがるそしげに  
の何となく勤く侍  
なり  
御士仕丁 御士ハ  
禁中守衛の士仕  
丁ハ親守ハ親使を  
ることも  
つゆ 評とい官  
殿のあまひの中庭

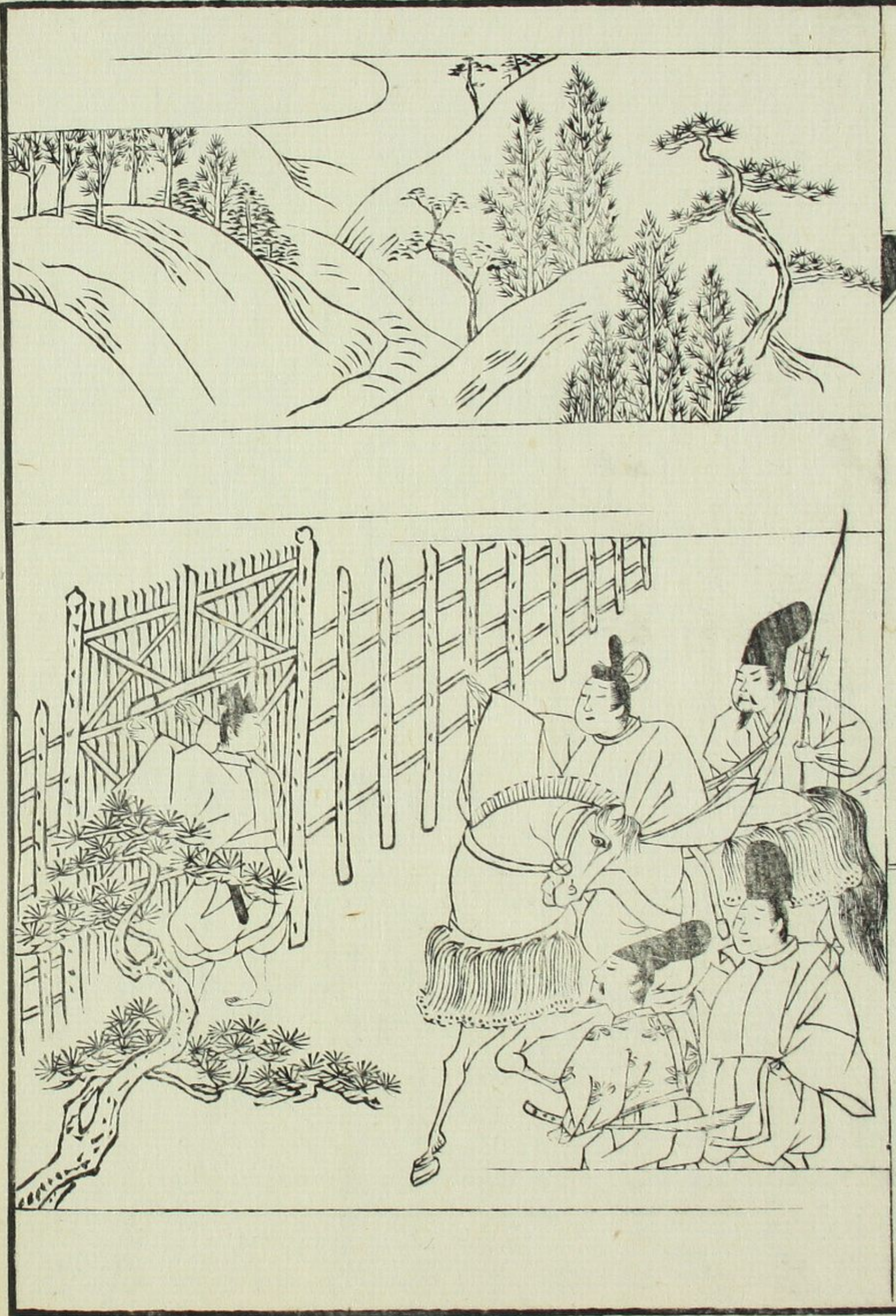
うらうたきもおつがへせ給ふも、中納言諸共ふこ  
の御道心こそうらめどけき。出家入道も皆例の事  
なきど、こゝといかゝぞやある御心さまのをりく出  
くるのこゝとならじ。只冷泉院の御元方靈おけけのぞき給  
ふなるべしなど、歎き申しわたる程も、猶あやしう例  
ならぬ物のすゝるはしげとのおはしませば、中納  
言なども御とのゑづちお仕うまつり給ふ程も、寛和  
二年六月廿二日のふ俄又失せさせ給ひぬとの志  
る内、のそこらの殿上人上達部あやしの衛士仕丁お  
いたるまで、残る所なく火をどもして、到らぬくまを  
く求め奉るふ、ゆめおはしまさばおほきおと頼忠とよ  
りはじめ、諸御殿上人残らば冬り集りて、つゆくをさ

あきたるち  
せきくかめ 固  
関とて鈴赤不破達  
阪の三関を固鑑ま  
るるもさ何何する  
ある時いかくまら  
倒く  
まうらめ 眼を  
おうつまをいよ

めづらなる小法  
師 流布の本小  
もつららとあり  
字鏡に肝張目憂  
也相豆々良と名ぬ  
まじらふらうとあ  
るに從り

へみ奉る小、いづこ小かおはしまさん。あさましうい  
みじうて、一天下こぞりて、夜のうち又せきくかたぬ  
騒ぎのゝある。中納言義懐の守宮神賢所の御前まで、伏し  
まろび給む。我たからの君はいづこ小あからめせ  
させ給へるぞやと、ふしまろび泣き給ふ。山く寺く小  
手をわらちて求め奉るよ、さらにおをしまさず。女御  
たち涙を流し給ひ、あをいみじと思ひ歎き給ふほど  
小夏の夜もはかなく明けて、中納言義懐や惟成の辨など  
花山に尋ね参り小けり。そこ小めづらかなる。小法師  
よて、ついでるさせ給へるものか。あな悲しやいみじや  
と、そこ小伏しまろび、中納言義懐も法師小なり給ひぬ。  
これ志げの辨もなり給ひぬ。あさましうゆゝゆゝ哀





かちうりおとしま  
しん ぶりの  
身が徒歩そおそ  
しんとあさまし  
と

三界云く 慾界色  
界を色界を三界と  
し四衢道といは  
ふ三界とある對句

小悲しこそ、是より外の事あべきふあらば。かの御こ  
とどきの妻子珍寶及王位も、かく思しごりたる也け  
りと見えさせ給ふ。さても法師ふならせ給ふはいと  
よしや。いかで花山まで道を知らせ給ひ、かちより  
おはしましけんと見奉る小あさましう悲しう哀まじ  
くなん見奉りける。かくて廿三日小東宮位まつらせ  
給ひぬ東宮次の冷泉院の二宮居貞をさせ給ひぬ。みかど  
へ御年七よならせ給ふ東宮兼家女の十一よぞおはしける。  
東宮も此東三條のおとこの御孫よこそおはしませ。  
いみじうめでたき事限りなし。こそ皆あべいこと也。  
さても花山院ハ、三界の火宅をいでさせ給ひ、四衢  
道のなかの露地小おはしましあゆませたまひつら

源氏物語抄

ふとれるなり  
寺屋のうらふ千  
福輪の文おとしま  
して 千福輪の福  
を諸奉願お作るに  
深りく福をまのち  
といふ佛く福救多  
き車輪の如きもの  
足らふありと  
りや溜るゆる佛屋  
跡あり

さまぐのふろこび  
け奉る本書の主  
たる道長の結婚よ  
り上東門院誕生の  
りきき無家六十の  
賀やと慶すの引

ん、御足のうらふ、千福輪の文おはしまして、おぼん  
あしのおとふ、色くのはちすひらけ御位上品上生  
ふ昇らせ給はん、知らば、此世より九重の宮の中のと  
もしび消えて、たのみ仕まつる男をんな、くらきよ  
ふまどひ、あはれふかしくなむ。さても 義懐 中納言もそ  
ひ奉り給はば、飯室といふ所、やがてこもり給ひ  
ぬ。惟成入道へ、ひじりよりけよめ、たく行ひてあ  
り。花山院の御受戒、此冬とぞ思しめ、ける。あさまし  
き事ども、次の巻あるぞし。

③ さまぐのふろこび

かくて十月寛和二ふなりぬま、御褌大嘗會とて、世の  
りたり。みか一條とて、つおおはしませば、御こ詮子ふの宮も

院へ行幸ありて  
さまぐのふろこび  
てゆくありふよ  
りまろ名つけしこ  
法親大嘗會 御  
褌の大嘗會行  
れん前の十月に時  
川小行幸ありて解  
除し給ふとされど  
河原のふらんとも  
豊のさそぎとも  
いふ大嘗會の天皇  
馬即位のどし十一  
月天神地祇を祀  
らせ給ふ大祀とし  
て、一代一度の大  
神なり  
女御代 助死智秘  
抄小幼主の時、時  
女御代とて大臣も  
納言の女をむし

ろともふたごまつるべも、まご宮の御方、女房を  
いさまぐいみとて世のりたり。女御代の御事を  
どすべて世のいみとて大事なり。かくて御褌ふなり  
ぬま、東三條の北おもての法いひち崩して、御さ  
させさせ給ひて、宮たちも御覧ず。其ほどの儀式あり  
さまえもいはずめでたきふ、一つ御輿帝とて宮おほし  
まは、宮の女房がたの車せ、又内の女房の車十、女御代  
の御車などすべてえもいとぬ事ども、まねび盡は  
づもあらば、常の事なま推量るべし。事どもはつ  
る程、又母家攝政どのおはしますを、御隨身どもいはんか  
たなく、つききさまふて打出でさるふ、又御前の  
人など、やむとあきまらかなる限りをえらせ給

てらる古くは元  
服の日やぞ其入  
を女侍と定められ  
けり未だよの必  
も然らば又幼まの  
時時を母后侍う  
るに乘らせ給ふ  
故不出車ありと  
ゆこれにて心得べ  
し  
ついひぢ 染玉ふ  
て今いふ工堀  
寺隨身云 隨身  
を路次整置園のよめ  
に随行せしむる士  
なる御前の人にと  
の前直してさまご  
ものこと  
やおとこをこまや  
を呼びかくる御を  
りこそは君といふ  
称ふ似たりははの  
御とあるべし  
后がね 行くくそ

つり。あきめをたと見えさせ給ふふ東三條の御さじ  
きのみすの片はし押しあげさせ給ひく、四宮色くの  
御ぞどもふ、こき御ぞなどのうつ、織物の御なほし  
を奉りて、みすのかさそむより指出でさせ給ひく、や  
おとここそと申させ給へる攝政殿あなまさかると申  
させ給ひく、いとうつくしう見奉らせ給ひく、うち  
ませ給へる程、すゞろふ見奉る人、いとよましう思ひ  
奉るぞし。

かゝる程に三位中將殿、土御門の源氏の左大臣殿の  
御むすめ倫子ふた所むかひばらふいみどくかしづき奉  
りて、后のねとおほし聞え給ふを、いかあるたよりふ  
か。此三位殿この姫君を、いかでと心深く思ひ聞え給

らるるおせんとかね  
て思ひ定むるとい  
ふ賢ふまき人を  
賢がねなどいふ  
に同  
口こそ黄ばるる  
ぬし 昔塚の児と  
いふとてまふ年  
のことなりゆゆふ  
とい努々といふが  
かし

ひく、氣色だち聞え給ひけり。されどお雅信、あな物ぐ  
るほし事のほりや。誰か唯今さやう又口こき黄ばる  
たるぬ、たち出し入れては見んとするとして、ゆめに  
まこしゑい、いせぬを、母上穆子れの女又似給はは、いと  
心かしくかどくしくおはしく、なごてか唯此君を道長  
聲もて見ざらん。とまぐ物見など不出で、見るよ、此  
君唯ならぬ見ゆるきみなり。たゞこれ又任せ給はれ  
かし。この事あしうやありけり、と聞え給へる殿雅信すべ  
てあべい事もあらばとおほいたり。此おとこはは  
らぐふ、男きんだちいとあまたさあぐりておほいけ  
り。女君たちもおほいすぞし。此御腹穆子も、女君二ところ  
男三人おむおはしける。辨時通や少將などおほはせし

此おとこははの  
小男公達あまご云  
云 雅信の男女の  
子あまごある中ふ  
正妻穆子のうらゑ  
るい時通時叙雅通  
倫子中君の五人を  
り其次牙左の如し

雅信

時通子母 時叙母同

扶義

雅通子母

倫子子母

中君母同

三君

ともまれバ

由まれハ心とそら

不離れいづるをい

ふ

うち春宮と云く

うち帝といふ帝

も東宮も幼くおは

しませバ倫子と后

小奉るべきよしあ

しきりしてさるべ

き智君もなげし

バ通不道と智取

給へりといふ

法師みなり給ひふけり。又招雅通はするも世の中をいと

はらなきものと思し、ともすもバあくがも給ふを、

いとらちめだき事と思されけり。かくて此母らへ

此三位殿道長の御事を心づきおぼし、たゞ急ぎふい

そがせ給ふを、殿雅信は心もゆかおぼいたれど、唯今の

みかどいと若うおはしまし、東宮居貞も又さやうおは

しませバうち東宮と覺へかくべきもあらじ。又さ

べい人などの物々おぼすさまあるも、唯今おを

せず。閑院の大将朝光などこそは、北重明女の方年おい給ひてあ

りなほし、て聞えなごすめもどかの枇杷延光舊妻の北の方を

どの煩はしくて、此母北の方聞志めしければ、たゞ此

三位殿道長を急ぎたち給ひ、智取り給ひつ。其程のあり

さまいとさざとがましく、やむ事なくもてなし聞え

給へば、攝政兼家殿位をどまだいと浅きが、うはら痛

き事、いかおせんとおぼしたり。いとかひあるさまふ

通ひありき給ひける。程あく左京道長のかみふなり給ひ

ぬ。いと若くしからぬつかさなご、我兼家もさてあり

つかさなりなど宣はせて、大殿兼家のなへ奉らせ給ひつ

るなりけり。今二所道隆道兼の殿原の御北の方たち、ことなる

事なう思聞えたるふ、此殿道長いと物清くきら、か

小せさせ給へり、外の人も何事おつけても、心ごと

小思ひ聞えたり。かの花山院へこそその冬、山まで御受

戒せさせ給ひ、其後熊野へ参らせ給ひ、まだ歸ら

せ給はざなり。いかでか、御ありきを志ならはせ

位などまゝい

さき云く、道長

位階なども高うら

ぬと雅信の聲、小と

りたること、丸のまを

りい、うまごきと

兼家のおもふふ

いと若くし

ねま、左京の大

夫、若き人ふハ不

相應の官ながら又

の兼家も一たびは

職、居るも、極も

つれ、いと、道長を

任下なりといふ



給ひけん、とあさましう哀ふ、かたどけなかりける御  
 すとせと見えたり。御をぢの義懐入道中納言ハ、たぐひ聞  
 え給はず。我は飯室といふ所へすゑ給ひて、いみじく  
 世の中あらまほしう、出家のほいは、かくこそと見え  
 て居給へり。此三月、御房の前、櫻のいとおもたろ  
 う盛りなりけき、ひとりごち給へりける、久しくあ  
 りてぞ、世におのつからり聞えたりし。

見し人も、わきまのゆく山里へ、心なかくもき  
 たる春かな。惟成の辨もいそぐらひじりよそ、唯今の  
 ほとけかなと見えきこえて行ひけり。  
 かゝる程、此左京大夫殿の御倫子うへ、けしきだちて悩  
 しうおぼしたきは、御讀經御修法の僧どもをばさる

尺一人も云々後  
 拾遺集雜ふ  
 法師ふむりく  
 住持りける、あま  
 根の花咲く侍り  
 けるとアそ  
 と詞ありて此お  
 をのさ但し山里と  
 いなくてふる里と  
 あり

榮村物語抄



けりきこもて 倫  
子懐妊のりきあ  
るこ

水もるまどけふて  
云、道長と倫子

ものよそ、驗しありと見えきこえたる僧たち召集め  
のゝ志る。大<sup>兼家</sup>殿よりも宮<sup>詮子</sup>よりもいかみくと何る御消  
息隙あう續きたり。さていみどりうのゝ志りつきごい  
とたひらうよ、殊まいさうも悩ませ給はで、めでたき  
女<sup>彰子</sup>君生さ給ひぬ。此御一家よは、始めて女生さ給ふを、  
必后がねといみじき事におぼしたれば、大<sup>兼家</sup>殿よりも  
御歡びたびく聞えさせ給ふ。よろづいとかひある御  
中らひなり。七日が程の御ありさま書きつゞくるも  
なりくなまごばえもまねをず。三日の夜ハ本家五日の  
夜ハ<sup>兼家</sup>攝政どみより、七日の夜は后<sup>詮子</sup>の宮よりと、さまぐ  
いみどき御うぶ養ひなり。いとゞ三位殿はおぼしこ  
くる方なう、水もるまどげふて過ぐさせ給ふ程よ、故

のるがら睡ましき  
とらふ  
源帥とみえが云  
云、さゆ大宰権帥  
小左衛門のうおまひ  
其季女盛の物ま  
の養女となりしう  
月の宴の巻小こえ  
らう

さるべきまややく  
然るべき宿縁や  
ありらんとく

村上の先帝の御もらからの十五<sup>盛明</sup>の宮の姫君、いみじ  
うかしづき給へるハ、源<sup>高明</sup>帥と聞えしが御おと姫君を  
とりて、養ひ奉り給ひしなりけり。其姫君を后<sup>詮子</sup>の宮よ  
迎へ奉り給ひし宮の御方とて、いみどりうやむどなく  
もてなし聞え給ふを、いづれの殿原も、いかでくと思  
ひ聞え給へる中も、大<sup>道隆</sup>納言殿ハ、れいの御心の色め  
きもむづかしきまで思ひ聞え給へるを、宮<sup>詮子</sup>の御前さ  
らみあるまじき事よ、せしし申させ給ひけるを、此  
左<sup>道長</sup>京大夫殿其御つぼねの人ふよく語らひつき給ひ  
て、さるべきまややくおとしけん睡まじうなり給ひふけ  
れを、宮<sup>詮子</sup>も此君いたはやすく人ふ物などいはぬ人を  
きばあへなるとゆるし聞え給ひしきさべき様ふもて

終末物語

なさせ給へども、わが御心ざし、も思ひ聞え給ふうち、  
宮詮子の御心もちるも、憚かりおぼされて、おろろならず  
おぼさせつゝ、ありわたり給ふ。

攝政兼家殿、今年六十又ならせ給へば、此春御賀あるべ  
き御用意どもおぼし免しつゝ、事どもえしあへさ  
せ給はで、十月ふと定めさせ給へり。はらなる月日も  
過ぎもていきて、東三條の院まで御賀あり。御屏風の  
歌どもいとまゝ、ふあれど、物騒がしうてかきとど  
めずなりおけり。家の子の君達皆舞人までいみじう  
みかど一條も行幸せさせ給ひ、春宮居貞もおはしまして、殿兼家の  
家司ども皆よろこび志こる中にも、有國惟仲を大殿兼家  
いみじきもの不覺しめしたる。有國は左中辨惟仲の

赤三條院 兼家  
の私亭なり扶桑  
略記ふるにこの  
賀は十月十四日の  
なり

右中辨ふて、世のおぼえ才なども、人より殊なる人こ  
りて、おのゝ此度も加階して、いみじうめでたし。かや  
うりて此月も立ぬまば、五節などを殿上人はいつし  
かど、心もとなく思ふ程、御即位の年は、さきもやむど  
あき事りて、今年は五節のみこそ、有様遵子けさやかふ  
お前も御覧じ、人も思ひためる、四條遵子の宮の御五  
節、又左大臣殿の左兵衛督時中の君、さして、受領ども  
奉る。御前の試みの御覧の夜などは、上一條若うおぼしま  
せど、きさいの宮おはしませを、其ふた間のみすの内  
のけはひ、人の志げさなど、せうくの舞姫などを、すこし  
物の心知りたらん、やがてたふまぬべう、はづかし  
うておもて赤むらんかしとんえたり。猶宮遵子の御五節は

五節 ござちと  
い毎年十一月の形  
常家の翌日豊  
の節會として行  
る。時を待たはら  
奉る女は五節の舞  
姫とも思ふ。そは五  
節ともいふ。五節  
と名づく。五節  
ごとく。神はあこ  
と五節。あこり。然  
いふ。江次第  
の西舞姫。公卿  
或は受領。その司  
の女はうまつる  
例。  
吉前の試み。帳書  
の試み。その形。常  
の前。まよ。試。ま  
覧。あ。す。こ。

臨時の祭 賀茂  
 十一月下の酉の日  
 不行とも  
 試樂 賀茂の社  
 奉まききし樂の試  
 及せらるるに  
 りかたり遊ひとい  
 破りたる奉樂の後  
 宮中へ入りて更  
 奏樂する例といふ  
 うへの判官うへ  
 との殿上りたる不  
 て判官とい檢査違  
 使の尉おちりたる  
 といふといふの云

いと心ごととなり。とやかうやとやうりぐよ女房いひ騒  
 ぎて、又の日の御覽ふ、童下づかへなどの様も、いづも  
 もく誰かは必しも人小劣らんと思ふがあらむ心く  
 をかしく捨がたうおぼしめし定めさせ給ふ。五節も  
 果てぬまへ。臨時の祭廿日餘りよせさせ給ふ。試樂も  
 をかしくて過きにしを、祭の日の還りあそび御前小  
 であるに、<sup>兼家</sup>攝政殿を始め奉りて、さべき殿原殿上人残  
 りなう侍らひ給ふ。此舞人の中よ六位二人あるに、藏  
 人の左衛門尉うへの判官といふ源兼澄舞人よてか  
 はらけとりたる不、<sup>兼家</sup>攝政殿御覽下て、まづ祝の和歌一  
 つ法かうまつるべしと仰せらるるま、<sup>兼澄</sup>小よひのま  
 にと打あげ申たきば、興ありく遅しくと殿原宣はす

字古本小なり使ふ  
 べきり  
 よひのつるに云々  
 源兼澄舞人よて  
 臨時の日の舞人  
 して宮の市り  
 不ぬり遊びふか  
 さらけとりし程  
 小大入た殿祝ひ  
 のつらきま  
 と仰せられり  
 ば  
 と洞あありて此お  
 せのそ  
 袖のおんぞ あこ  
 あはれ東の下ふ  
 着る織物なり  
 但し束帯の時ハ用  
 るる例とぞ桃花  
 菟葉系に袖は春冬  
 ハ之と着せし  
 然るを近代一向略  
 之云くと又云う

る不、君をし祈り置つとばとそへまじたり。大<sup>兼家</sup>殿いみ  
 ドう興せさせ給ひて、遅しくと仰せらるれば、まだ夜  
 ふかくもおもほゆるかなと申したきば、いみじうけ  
 うト譽させ給ひて、<sup>兼家</sup>攝政殿袖の御ぞぬぎて賜す。世  
 の中は五節臨時の祭だよ過ぎぬまを、残りの目日あ  
 る心地やをす。志はすの十九日ふなりぬまへ、御佛  
 名とて、地獄繪の御屏風など、とうで、志つらふも目  
 とままり哀なる不、折しも雪いみと降りけまへ、送  
 りむかふといひ置きたるも、げよと覺えたる不、殿上  
 人の菩提聲も、あやみくなるまで聞えたり。つごう、<sup>小盡廿九日</sup>宮  
 宮などのものゝ志る。つごもりりかうりぬまへ、<sup>一條</sup>過難  
 とのゝ志る。上いと若うおはしませバ、ふりつごみか

汚佛名 十二月十九日より三日の百  
之或一夜の例も  
ありとぞ佛像及び  
地獄変相の佛屏風  
をたてたるこれハ  
三世法佛の名号を  
唱へて六根の罪を  
滅するにあらざり  
送りむらふと云々  
拾遺集平兼盛  
のちにかさふれハ  
り身小つもる年  
月を送りむらふと  
何いそぐらんと  
るをもとめてか々  
り  
追離 なやらひの  
みく  
ふつづみ 和名  
杵音楽部小鼓  
和名美利とあり小  
児の鏡ふものこ  
正月小行幸

どして参らるる小君達もをかしく思ふ。かくて年號  
かはりて、永祿元年即永延三年といひ、正月圓融の院不行幸あり。  
院も入道せさせ給ひましければ、圓融院不行幸へハ  
其院不行幸あり。例の作法の事どもよて、院づかさ  
どよろこびさままぐりて過ぎもてゆく。  
かゝる程、大兼家殿の御心ち悩ましうおぼしたまをよ  
ろづ小怖しき事よて、殿原も宮も志のこさせ給ふ事  
なし。此二條院もれ、けもとよりいと怖しうて、こを  
がけさへ怖しう申す。様くの御もの、け乃中に、かの  
女保子三宮の入交らハせ給ふも、いみじう哀なり。猶所か  
へさせ給へと、殿原申させ給へと、此二條院を猶めで  
たきも、お覚しめして、聞しめし入させ給はぬ程

あり 天皇年の姤  
めよ上皇及び母后  
の宮を奉り給ふと  
相親行幸といふ  
院つらさ 院つら  
て院の庶務と掌  
る職なり 按む  
に円融院の實和  
元年八月廿九日  
出家法名金剛  
法と申す 年廿七  
なりき  
女三宮の入交らせ  
給ふも 女三宮  
の村上帝の寺を  
兼家守りかよえ  
れ、後にはか  
て院へ小程なく  
うせ給ひし、かそ  
の市恨の氣いりま  
たれうと  
あやめのねのか  
らぬま、菅浦の  
根不泣く音をうね

小御悩みいと、おどろけとて、東三條院不行幸ら  
せ給ひぬ。宮々の御前もいみじう歎かせ給ふ。攝政も  
辭せさせ給ふ。つう奏せさせ給へと、猶志をし、とて  
過ぐさせ給ふ程、御悩みまことよいとおどろけし  
けとて、五月五日の事なれば、あやめのねのか、  
らぬ御袂なし。太政大臣の御位をも攝政をも辭せさ  
せ給ふ。猶其程の関白などや聞えさすべからんと見  
えたり。猶いみじうおはしませば、五月八日法名如實出家せさ  
せ給ふ。此日攝政の宣旨内大臣殿道隆かうぶらせ給ふ。さ  
まご、只今の此御悩みの大事なまご、嬉しともおぼし  
あつ。是こそ、その限りの御事なれと思し、駭がせ給ひ  
く、二條院を、やがて寺となさせ給ひつ。若し、たひら

て涙のかわらぬ袂  
ぢりとひびかき  
たる文をうき音の  
あやのあつらひ  
くまこと定まれる  
儀なり  
攝政をも辞させ  
給ふ。正統記に攝  
政病みなり。嫡子  
大臣道隆小譲り  
て出家。猶准三宮  
の宣と崇の執教  
の人出家の始なり  
りとみ也  
二条院にやうり  
寺小なさせ給ひつ  
二条院の兼家の  
邸なり。寺小なり  
て務善寺といふ  
又法興院といふ  
い兼家の法益と  
号せられたり  
室方 興向の中

かよもおこたらせ給はる。そこおはしませ給へば  
り。殿の内いみじうおぞし。惑ふも猶さらおこたら  
せ給はば。攝政殿の御有様いみじうひあつてめでた  
し。北貴子の方の御はらからの明順道順サ子信順ガなどいひく  
おほかさいとあまゝあま。宣者も北の方の御はら  
からの攝津守貴子為基がめなりぬ。北の方の御親成忠もまだ  
あり。大殿の御悩みのかくいみじきを誰も同じ心に  
思ひぬんと聞え給ふ。攝政殿御氣色給はりて、まづ此  
女御后定子より急奉らん。の騒ぎをせさせ給ふ。わき一の  
人よならせ給ひぬ。ば、萬今は御心ふるを、此人明順に  
そののかしおたり。六月一日后立せ給ひぬ。世の人  
いとわら折を過ぐさせ給はぬをぞ申せぬ。

次も役とまる女官  
なり。中宮を宣ま  
た攝政も附けら  
る。

わら程小圓融院の御悩ありて、いみじう世のくま  
りたり。折しも今年行幸なかりつるを、おぼつかた  
思し聞えさせ給ふほど、わらわら事のおはしませば、  
行幸一條あまのいみじう苦いげおおはしませ給ふ。みづと今  
の御わらふりなごせさせ給ひく、おとなびさせ給へ  
るを、かへもぐかひありて見奉らせ給ふ。さき御領  
の所く、さき御寶物どもの書立目録せさせ給へり  
けるを、それ皆奉らせ給ふ。みづと若うおはしませ  
ごいかみくとおぼし歎かせ給ふ。院は唯さらも聞  
えさせず。常の行幸不似ぬ御有様もいみじう哀にて  
かへす。覺し見奉らせ給ふ。御ものけりも怖しけき

ば、とく歸らせ給ひねとて返し奉らせ給ひつ。さてお  
 ぼつかなきをいふゆゑと思し聞えさせ給ふ程、日  
 ごろありて正暦二年二月十二日年三十三不失せさせ給ひぬ。  
 くらら此年頃なき仕りまつりつる僧俗殿上人判官  
 代、涙を流し感ひたり。いはんかたなし。仁和寺の僧寛朝正  
 と聞ゆるに、土御門の源氏のお雅信との御まらからふ  
 おはは。又わじのみこと数実聞えける御子よおはす。いと  
 トラ覺し惑ふ。かの釋尊入滅のくらちして、大師入滅  
 我隨入滅と、橋梵波提がいひて、水となりてあうまけ  
 ん心地する人いと多かり。哀又悲しとも愚あり。一條うち  
 小は一日の行幸の御有様思し出で、戀ひ聞えさせ  
 給ふ。

大師入滅我隨入滅  
 云々 此の事大  
 智度論二見え  
 たり大師の釈迦を  
 つ橋梵波提の羅  
 漢の名なり

四見はてぬ夢

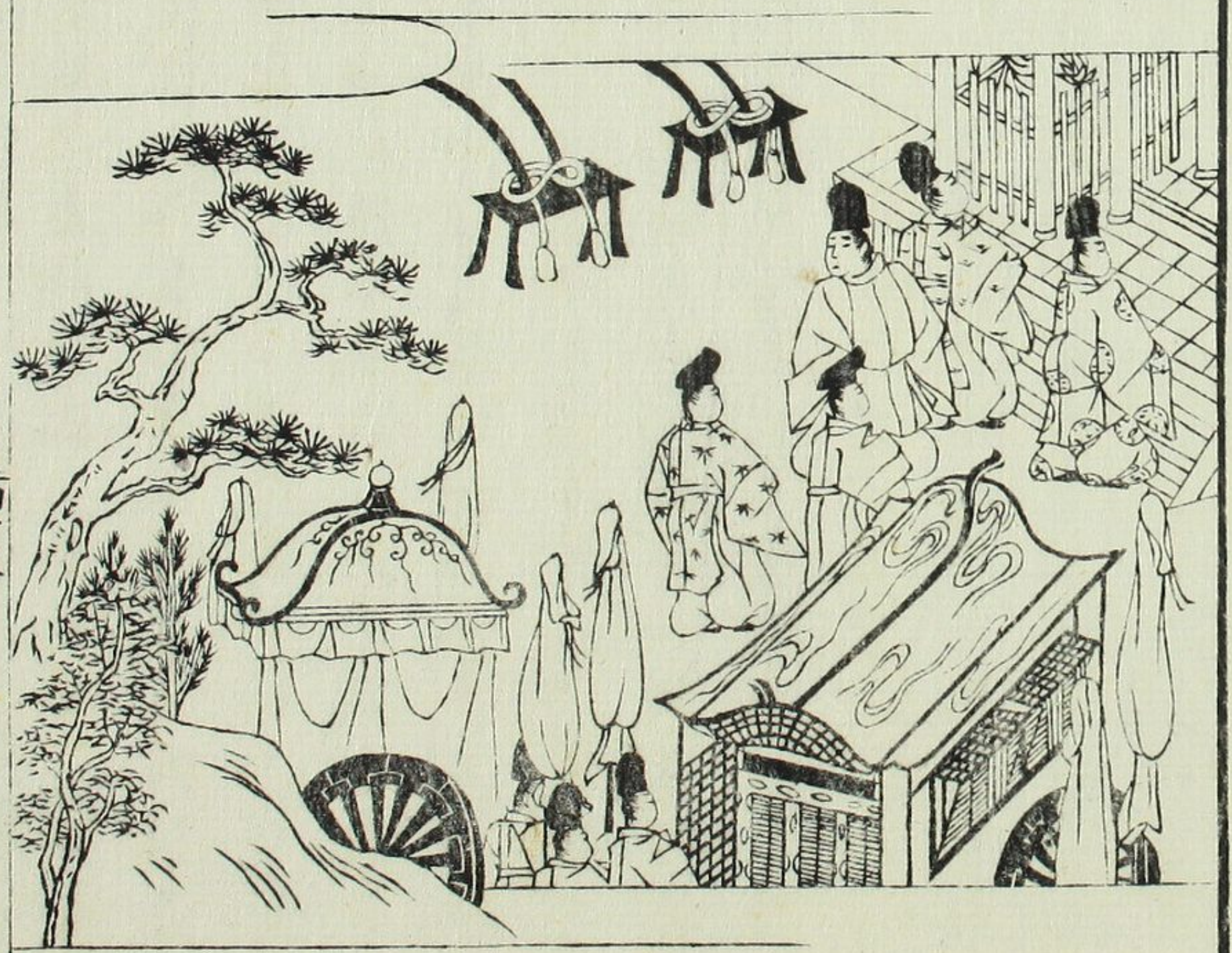
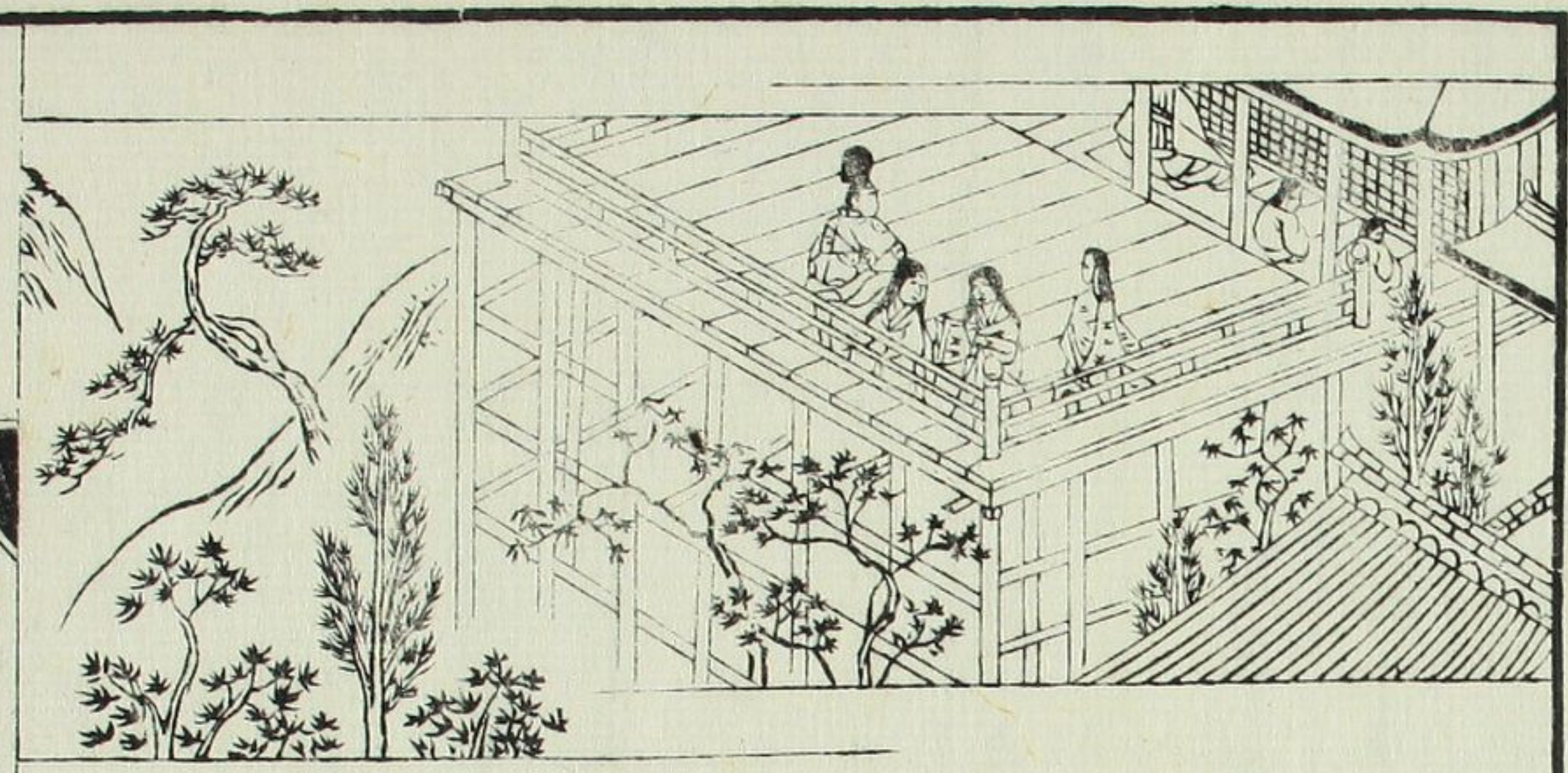
唯今世不いふとき事盛子は、きさいの宮悩ませ給ふ。世  
 の只今の大事ふのと思ふ程、さきぐの御ものけ  
 の氣色など例の事なり。すべておはしますすべき様な  
 らば、内藤も行幸などせさせ給ひくらづと思し、まご  
 ばせ給ふ。ともすまばふる晝わかず取いれ、志たて  
 まつとを、今ハ唯いかで尼不なりなむと宣をするを、  
 殿原も志ばし、さるまじき事ふのみ思し申し給へ  
 と、さら又限りと見えさせ給へば、さばとてかかくて  
 も、おはしまさんのみこそとてならせ給ひぬ。浅ま志  
 ういふとき事あれど、たひらかおなまさまさんのほ  
 いなるべし。さて世ふある事の限り志つくさせ給ひ

又てわ夢は、  
 とかく久つけし  
 なる夢無去のち  
 出雲前司相如と  
 のありて、つらぬら  
 れぬべ  
 夢ありて、まの  
 もあふべき君は  
 らばねられぬい  
 も歎らざらま  
 よくて又程なく失  
 せられねわ如の女  
 が  
 夢のんぞと歎き  
 一君の程もあ  
 まさうゆをえ  
 ぬが悲しきとよ  
 けりあるふあり  
 て  
 なむらうと招きし  
 さまのそ、尼ふ  
 ちう給ひしすへ  
 あさまさ限り

あれどは平倉家  
まさんの侍本妻  
なるべしとあり  
石山小云く 石山  
ハ江洲志賀郡小  
り長谷寺ハ和歌  
城上郡ナリト云  
観世音菩薩を  
清せり

女院とすえさま  
東三條院と申  
なり女院の始り  
年官年爵と云  
不つうさかろ  
とありふみほしお  
陣屋 宇治屋  
を築言樹の士の法  
所なり

て、又かくもならせ給ひぬまばよや。御悩もよろしく  
ならせ給ひぬ。石山小年毎不招をしまさむ限りハ参  
らせ給ひ、長谷寺住吉など不皆冬らせ給ふべき御願  
どもいみじかりけむバ小や。おくららせ給ひぬ。内小  
も嬉しき御事不思一聞えさせ給ふともおろか也。御  
年も三十<sup>廿二</sup>より不招をしまし、いみじうあたらしきお  
ほんさまもて、あさましうくらを、しき御事なれども  
おろるのみかど不催へて、女院と聞えさす。さて年官  
年爵えさせ給ふべきなり。年ごとの祭の使もとま  
りて、たゞ陣屋などもなくて心安きものから、めをた  
き御有様なり。女院の刺官代など、かたほならずえ  
らびなさせ給へり。さて其年のうち、<sup>十月十五日</sup>長谷寺に参ら



りて、羅漢の名  
小離婆多といふが  
あれがそれや  
ほめき、童の女  
小何きといふこと  
此時代の風なり源  
氏物語にもこもき  
いぬきなどいふ若  
尼あきいさみの略  
るや

せ給ひぬ。御供ふは上達部殿上人、年若くいみじき狩  
衣すがさをしたり。おとな殿原は直衣よて仕うまつ  
り給ふ。攝政殿御車よて仕うまつらせ給へり。院の唐  
の御車小奉をり。女房車のさきよ、尼の車をたてさせ  
給へり。いみじき見物なり。年頃侍らへるもさらぬも、  
尼十人ばかり侍らふ。みゆきとて童よて侍らひしが、  
御供小尼よ成りふしかをりはだといつけさせ給へり。  
わらはべ年ごろ仕はせ給をざりしも、今ぞ多く参り  
集りたまはばほめき隨喜、い喜きは花な籠、志籠きみあどさあぐ  
つけさせ給へり。さて春らせ給ひて、めでたき様小佛  
も仕うまつらせ給ひて、僧をもかへりみさせ給ひ  
て、歸らせ給ひぬ。

正月より世の中い  
と騒がしう、春  
の原より疫疾流  
行し百ふさりて  
遊りふなり人  
まじらせぬ  
関白殿の侍り  
こころと病氣  
のこころ  
今年ハまづちも  
人などいさ、下  
病の若い此えや  
ふりりて大り  
失せぬらん今上  
流の人をも及び  
いと怖しと

かくて長徳元年正月より、世中いと騒がしうありた  
ちぬまはば、残るべうも思ひたらぬいと哀なり。女院齋子小  
は関白殿の御こころち怖ろしうおぼす方ハさるもの  
よて、世の中心にどろふもおぼしおきてずやと、さ  
まぐおぼし亂させ給ふ。今年をまづあも人などは  
いとサヘいみじう、只此頃の程小失果てぬらんと見ゆ。四  
位五位などのなくあるをを更あもいはず。今ハかみ  
小あがりぬべしなどいふ。いと怖ろしき事限りなき  
小、三月ばかりよなりぬまはば、関白殿道隆の御悩みもいと  
頼もしげなくおはしまし、内よ夜のほど春らせ給  
ひて、かくてみだりごころちいたく悪く候らば、此  
程の政ハ内大臣行なふべき宣者くださせ給へと奏



さてかう一本小  
さむりりとうり  
いづれまでもある  
べし  
三月八日の宣旨  
云々 百孫抄云々  
月七日關白所寄之  
向宮中雜字云々  
觸肉大臣之由宣  
下と云々  
世の中こち 流  
行病といえんが如  
し  
胸をしり 恐まお  
もふ心より胸動き  
ておちつりぬとい  
ふ  
肉大臣殿昨日そ隠  
居りて 執柄大臣  
などふい撃つ御  
たりおほやけより  
御府の士と賜ひ  
て附けらるる所  
り之を隨身兵使

せさせ給へば、げにさをかう苦しうし給はん程はな  
どかいとおぼしめして、三月八日の宣旨も、關白病の  
間、殿上及び百官施行とあるよし宣旨くだりぬまは、  
内大臣殿よろづおまつりごち給ふ。かゝる程は、關院  
の大納言、世の中ごち煩らひて、三月廿日失給ひぬ。  
哀ふいミドき事なり。あすは知らば、今にかうあめり  
と、さぶき殿原胸はしり怖しうおぼさるゝ、不、關白殿  
の御こゝちいと重し。四月六日出家せさせ給ふ。哀ふ  
悲しき事不た不し惑ふ。北の方やがて尼となり給ひ  
ぬ。さるゝ内大臣殿昨日ぞ隨身などさまあぐえさせ給  
へる。かくて哀ふいかみくと殿の中覺し惑ふよ、四月  
十日入道殿失せさせ給ひぬあなみじと世のこし  
道隆 年四十三

といふ内大臣は  
天下執行の重き事  
りて隨身なき侍  
まつりとなり

皆うち傾きつらん  
く多かり 世に  
今い伊周若年より  
執柄とされるとい  
ころと傾きて心服  
せぬ  
人のきぬ袴のたけ  
云々 伊周又の喪  
みよこから種々  
の政を強ひし  
衣服の制をさへ  
てられとあるま  
とまきふ思ふ人も  
ありと云

りたり。内大臣殿の御まつりごとは、殿の御病ひの間  
とこそ宣旨あるふ、やがて失給ひぬまは、此殿いゝを  
る事にかと、世の人世のはかなさなりも、これを大事  
ふさいめき騒ぐ。内大臣殿は只われのこゝろづおま  
つりごちおぼいたま。大かたのせふは、皆うち傾き  
いふ人く多かり。大殿の御送葬、加茂の祭過ぐしてあ  
るべし、其程もいとをり悪しういとほしげなり。かゝ  
る御扱もひあまきども、あべき事ども皆おぼしおきて  
人のきぬ袴のたけのべあがめ制せさせ給ふ。只今い  
とかうらで知らぬがほりても、まづ御いゝの程は過  
ぐさせ給へかゝともどかしう聞え思ふ人とあるべ  
し。北の方の御せうとの、何れもこのりみども、いかなるべき

二位の志んぼち  
伊周の外祖又高階  
成忠の二位なり志  
んぼちの彩段志と  
かきて彩ふ入るし  
たる様と

内大臣世の中危  
招致さるふ云々  
伊周の執柄たる  
父道隆病の間とい  
ふ言ふかれは引株  
き天下の政事とせ

んといひらばて関  
白の職の叔父の道  
兼よりうらんと  
危く抑もふふと  
えもいぬ法と  
とて大元師法とい  
ふ師の字とよまぬ  
が口傳をさるうけ  
法の唐終りう傳  
りし秘法ふて終  
廷の外に私に行ふ  
る様とさる  
粟田殿と怖しきも  
のみ多く 道兼の  
伊周の叔父ふ  
故道隆関白の弟  
なればゆ草のよう  
に道兼と関白  
と深らるべきを  
れがこれと怖しき  
ものふ思ひて咀ふ  
ふと  
其けふいふるふ  
やま 道兼関白

事ふかと思ひあはてたり。二位の志んぼち此いみふ  
もこもらでさびき僧どもしてさむくの御祈りども  
行はせて、手を額にあて、よるひる祈り申す。あない  
みじといひ思ふ程ふ、濟時小一條大将四月廿七日ふ失給  
ひぬ。宣耀教明殿の一官もいとをさなくおはしますを見  
おき奉り給ふほどいといみじ。左右の大将志ばしも  
おはせぬも悪しき事にや。道長中宮大夫殿此御かはりふ  
左大将となり給ひぬ。大殿の御送葬祭すぎて四月の  
つ小廿九日ごもりふせさせ給ふべし。濟時小一條の大将も同じを  
りなり。哀ふいとじき事どもなり。伊周内大臣殿世の中危  
ふくおぼさるふ、成忠二位をとゆむなくとせぬ宣へを  
二位えもいはぬ法どもを我もし又人々とも行はせ

て、さりととも心のどかおぼせ。何事も人やはする。  
たゞ天道こそ行はせ給へとたのめ聞ゆ。成忠子明順道順御をぢの殿  
原世の中を安からず歎きおぼしき、めきたるハ、粟  
田殿を怖しき物と思ひ聞えたるふなむ。東三條詮子又女院の御  
心おきても粟田殿知らせ給ふべき御事どもありて、  
其けはひ得たるふやあるらん。世の人残りなく参り  
こむ程に、伊周内大臣殿の御歎きさへありて、さむぐもの  
おぼし歎く程ふ、道兼粟田殿夢見駭がしうおろしまし物  
のさとしなとすれをよや。御あちも浮きたるさま  
おぼせられて、陰陽師などふ物をとはせ給ふも所  
を替させ給へと申をめまはさるべき所などおぼし  
求めさせ給へと、又御歡びなど一口ならずさまむらう

とるべき様子  
世人も知りたる事  
らんし  
市秋、びかど一口を  
らま、陰陽師の占  
ひふも或いぬま  
ひひ或い度るとい  
ひ一定せぬとて

かうのしらせ給  
ふ関向殿うも云  
かく威勢ありて世  
間ふいひるやされ  
道隆ふも退任  
せす深く道兼と  
れつづる人の家ぞ  
とく  
やりかたありて  
云、やり各遣  
水まて泉水のこ  
く方違へ所い方  
位のお、まを避く  
べき家は吹陰

陽師の説ふより  
方角のお、まを  
忌みまもたらと  
ありき  
位などいといし  
時平の孫なれば  
菅仲の崇りうて  
や位たもはしと  
く

折、ゆこふま  
相あら家小區画の  
折から関白とかれ  
るを全う方位の宜  
しき家あるある  
しぞと思ふ  
内大臣ふい、らつ  
打きまうたる云  
道兼い、関白と  
かり、ら伊周の

らなるひ申を恠しう思さる。此殿の内ふ、か申うの物  
のまとし御慎みある事を内大臣殿聞せ給ひ、御祈  
りいふくいみじ。かくたゆむよなき御祈りのまとし  
にやと物怖ろしげふ申思ひたを、栗田殿四月つご  
もりふ、外へ渡らせ給ふ。そまは出雲の前司相如とい  
ひける人の、年頃かうみくあらせ給ふ、関白殿ふも冬  
らで、唯此殿をいみトき物又頼み聞えさせつるもの  
の家なり。中川重信左大臣殿近き所なりけり。ち、の内  
藏頭相信の朝臣といひける人の造りて住ける、池や  
り水山などありて、いとをかしく造り立て、殿の御  
方違へ所といひ思ひたりける家なりなり。此すけゆ  
きも、かの時平のおととの御子の、敷忠の中納言の御

うまごなりけまば、まや、位なども浅う、人こからぬ  
有様よてあるまやとぞ、世の人もいひ思ひける。さて  
其家小渡らせ給ひて住ませ給ふ、障子どもふ手づ  
から繪かきなどして、おもしろきさまふなむ志たり  
けまば、殿なども興せさせ給ひて、世の人も参りこむ  
ふ、御こち、ち、猶ら、まても、例ざまもおはしまさ  
ざりけり。かくておはします程ふ、五月二日関白の宣  
旨もて参りたり。折志もこころいかりおはしますを、家  
あふじも世のめでたき事と思ひ、人くもいみじう由  
思ひり。世の中の馬くるま外よあらどかしくとみえ  
たり。内大臣殿ふはよろづうちさましたるやうよて  
浅ましう人笑られたる御有様を、ひと殿の中思ひ歎

方何じも打さ  
まーたるやうそ  
殿中皆欲き事も  
りとかかいひざ  
へ搔膝も膝を抱  
きて物おもふさま  
なり

ほんなと春らまき  
ど 厚朴のかそを  
あやせうと薬あり  
賀彦保憲女集ふ  
あー引のつまひ  
やむてふふのか  
と吹ふる風もあら  
とくを却もふとい  
ふまあり風取を  
小服まろく

ぬるませ給ひよ  
バ少し快気不趣  
けるをいふ  
子の始めなれバ  
関白ふなれと姑  
より浦經などの佛  
事へ思あふこと

うちあげ 手を打  
あがるう酒宴の  
うとらうとソノ  
く

きかいひざとかいふ様もて、あないみじのわぎや。只  
もとの内大臣もておはせましかば、いかよめでたか  
らまし。何の志ばしの攝政あをまづ、関白の人笑は  
まなる事をいづきのちごかは思ひ知らざらんといふ  
りみいみじうなん。かゝる程に道兼関白殿御心地なほ悪  
しうおぼさるもバ御風もやなどおぼして、厚朴厚朴など  
まゐらすれど、更におこらせ給はば、起きふし安か  
らず思さるたり。さゝい世の人も、かくて是ぞあべい  
事、いかで伊周年三二かちこゝ政をせさせ給ふやういあらむと  
申思へり。道長大將殿も今ぞ御心ゆくさまと思さるける。  
伊周内大臣殿は只も御忌みの程ハ過ぐさせ給ふで世  
の政のめぐるとき事を行使せ給ひ、人の袴のたけ、狩ぎ

ぬの裾まで、のべあが免給ひけるを、安からば思ひけ  
るものどもい、のべ志づめのいと疾かりしけぞやと  
ぞ聞えける。五月四五日ふあれば、道兼関白殿の御心地ま  
めやか不苦しう思さるまきど、ぬるませ給ひたまは、え  
ごもかうもせさせ給はず。御讀經御誦經など唯今あ  
るべきあらば、事の始めなまば、いまく志うおぼさる  
て、せめてつとせなるもてなさせ給ひ、起きふしわが  
御身一つ苦しげなり。殿の内よは侍ひよるも晝も  
露のひまなくせかいの四位五位殿原までおはしま  
しこみ侍らふ。御隨身所御舎人所は酒を飲みみく志  
りて、うちあげの志ある。我君の御うちや、かう苦し  
うおはすらんとも思ひたらば、道長左大將殿目くおおは

まがしき筋 福  
あがまきま  
いふまき病氣  
れど失せ給ふと  
ハ澄も思ひかた  
と之

瀧口たちき 職  
原抄下よる不院  
仕ふる上北面  
いひ東宮不仕  
を帯カと云ひ林  
不召仕と云ふ瀧

しましつゝ有るべき事どもを申しおきてさせ給ふ。  
猶いと浅ましき御心地のさまを心得ば見奉らせ給  
へど、まがしき筋には誰もおぼしかけずかて  
此御心地まさらせ給ひぬまば、今はとありともか  
りともとて、<sup>五月</sup>いたち六日の夜中よぞ、<sup>モト</sup>二條殿伊周歸ら  
せ給ふ。かゝる事ども隠さなければ、<sup>二條</sup>内大臣殿伊周は、奥  
ゆかしく覺さるゝもことりふなむ。<sup>二條</sup>殿の中今いつ  
つみあへずゆすりこちたり。大かたの騒がしき内ふ  
も、かゝる御事どものあり定まらぬ事さへあまを、内  
渡り道兼もさるべき殿原侍らひ給ひ、瀧口帯カたちはさな  
ど番かゝず侍らふ。<sup>道兼</sup>二條殿遠量女は北の方日頃唯もお  
はせぬよ、此度の女君と夢も見え給ひ、うらも申

口とつゝ 共ふ  
武官なり

物ふぞある人  
くの混雑もたま  
なり

あなかま云く あ  
ち置りの下路を  
りおまう給ふと制  
して人の死亡せし  
る病める殿のゆら  
せ奉ることとむむべ

しつゝを、<sup>道兼</sup>殿いつしかと待ちおぼしつゝ、かくめで  
たき御事さへねらしませば、かならず女君と待思ひ  
聞えさせ給へる、かうおぼしめますをいかみくと殿の  
内ゆすりみちたり。<sup>道兼</sup>女院道兼よりも御つうひ隙な。大將  
殿と哀おぼしあつかはせ給ひて、御通經ふら  
づの物運びいでさせ給ふ。みまやの御馬残りなく、御  
車半道兼いたるまで御通經など多くおきて宣はす。か  
くありて、いかゞと殿の内の人々物よぞあたる。五  
月八日のつとめてきけば、<sup>重信</sup>六條の左大臣、<sup>保光</sup>桃園源中納  
言、<sup>天王寺別當</sup>清胤僧都といふ人など失せぬとのゝあれば、あを  
かまかゝる事はいむべきなり。<sup>道兼</sup>殿道兼な聞せ奉りそと  
誰もさかしくいひ思ひつゝ、<sup>道兼</sup>ども同じ目の未の時ば

さまの殿原云々  
 さま小関白よりか  
 ら失せし人々の  
 多かれど、七月  
 七日関白して失せ  
 たる例いんせと  
 世を志するは天下  
 の政事を知るこ  
 かり

さまの殿原云々  
 さま小関白よりか  
 ら失せし人々の  
 多かれど、七月  
 七日関白して失せ  
 たる例いんせと  
 世を志するは天下  
 の政事を知るこ  
 かり

かりふ、浅ましう年三十五ならせ給ひぬ。あなまぶくし。殿の内  
 のありさま思ひやるべし。道長左大将殿は夢小見なし奉  
 らせ給ひて、御顔よひとく、此袖おしあて、あゆみ出  
 させ給ふ程の心地、更小夢とのとおぼさる。哀小おも  
 ぼし聞えさせ給へりける御中なれど、ゆイヤテラくともお  
 ぼさずあつかひ聞え給へるかひなき。同じ御はらか  
 らと聞ゆべきもあらず。道隆関白殿失給へりしに、御と  
 ぶらひたふなかりし、哀小頼もしくあつかひ聞え  
 給ひつる、かひなき事をかへ道兼殿方よはおぼし歎  
 く。さいへど殿粟田の年頃の人こそあは。此頃冬りとり  
 つる人々は、やがて出で、いき果てふけり。粟田下ノガ関白の宣  
 るかりぶらせ給ひて、今日七日よぞならせ給ひける。

さまの殿原やがて世を知らせ給はぬ類ひはあは  
 ど、かゝる夢いまま見ずこそありつる。心憂き物よあ  
 ん有りける。かの内大臣殿伊周あさましうをこがまし  
 かりつる御有様の、押移りたりし程を人笑をき小い  
 みじうねたげなりつる。後い知らじ。程なり世をみ  
 あはせつるかなと嬉しうて、成忠二位の新發意祈りたゆ  
 まずいと志うさりとあくと思ふを。げよさも有  
 りぬべき御ありさまのためをと思ふぞげおほほ  
 やけをらたくれける。此粟田殿の君達ハはかくしう  
 おとなび給へるもなし。いと若うけふくだみてぞ二  
兼隆人おはすめるも、いと哀を小見え給ふ。其夜さりやが  
 て粟田殿ふゐて奉りぬ。十一日小御送葬せさせ給ふ。

火水ふ入り感ひ  
火水ふ入りといふ  
河津の木の葉を  
ふ多くありを  
きふして盡力する  
こと

いぬねられで  
いぬねられで  
いぬねられで

かへも、あへなういみじう心憂し。かの中川の家相如あ  
るじ、人ふりも衰とお道兼不したる、又限りなう嬉しと思  
ひけるよ、又かうお道兼はしませば。世を心憂くいみじう  
思ひて、此御送葬の夜、心ざしの限り火水ふいり感ひ  
あつかひ明し奉りければ、心地も悪しうありて、家よ  
いきて物をいみじう思へば、よやあらん。くちこそ  
いと悪しけむといへば、むすめどもいと怖しき事よ  
思ひく歎きけり。かくて御いみの程、皆栗田殿におは  
すべし。是のみならず残りなく皆人のなるべきよや  
と見え聞えて、淺まき頃なり。かの家相如あ、ト栗田殿  
ふとのゐるを、只ちろづよ思ひ續け戀しうおもひ聞  
えけむば、いぬねられでひとりごちけるか。

枕詞  
りごうハ獨言の  
約言  
るならでま  
の歌詞花集ふのせ  
て栗田の左大臣  
まうりみくろ  
めると何書あり

殿の序法子 中陰  
とて四十九日の供  
養なり

夢ならで、またもあふべき君ならば、ねらむぬい  
をも、歎かざらまじ。とよまたるを、五月十一日より心  
地まことふ悪しう覚えければ、其つとめてむすめど  
もの家よいきてこちのあしうおほえ侍れば、苦し  
うなるい、必いくづもおほえ侍まば、きて来つる  
ぞといひて、此栗田殿よて一夜いのねらむざりしか  
ば、かくなむと歌を語りて、硯の志たなる白き色紙ふ  
書きつけてえさせたり。歸りてやがて心地いみじう  
煩らふなりけり。家の内いみじう歎きて、いかみくと  
ちろづよ思ふ程、小限りよなりよけるを、りも、栗田殿の御  
法事ふだよあはずなりぬる事を、かへもいひけ  
る。さて同じ月の廿九日失せふけり。家の内の人い

夢みずと、歎きし君をほどもなく、またわがゆめ  
不見ぬぞかなしき。失給ひよし殿原の御法事ども皆  
かたそしよりしてけり。此栗田殿の御事の後より五  
月十一日みぞ、左大将天下および百官施行といふ宣  
旨くだりて、今、関白殿と聞えさせ、又、雙ぶ人なき  
御有さまなり。女院も昔より御心ざし取こき聞えさ  
せ給へり。事なむ、年ごろのほいなりと覺しめし  
たり。此内大臣殿は、栗田殿の御有様ふならひて、此度  
もいかゞと思すぞをこなりける。さりともと頼もし  
りて、二位の御祈りたゆまぬ様なり。世の中さながら

女院も昔より云々  
詮子いさぎよ  
り、次第の道長を  
愛し、たれ、今度  
関白とせし、今度  
未の素志をかへ  
と免き由なり

が、思はざらん。悲しき、同じ事なり。日ごろありて  
むすめのみみける。

夢みずと、歎きし君をほどもなく、またわがゆめ  
不見ぬぞかなしき。失給ひよし殿原の御法事ども皆  
かたそしよりしてけり。此栗田殿の御事の後より五  
月十一日みぞ、左大将天下および百官施行といふ宣  
旨くだりて、今、関白殿と聞えさせ、又、雙ぶ人なき  
御有さまなり。女院も昔より御心ざし取こき聞えさ  
せ給へり。事なむ、年ごろのほいなりと覺しめし  
たり。此内大臣殿は、栗田殿の御有様ふならひて、此度  
もいかゞと思すぞをこなりける。さりともと頼もし  
りて、二位の御祈りたゆまぬ様なり。世の中さながら

大ニ

押移り小たり。内大臣殿世中をいみじうおぼし歎き  
けむ。御をちともや二位など、何かおぼす、今、只御  
命をおぼせ。只七八日、てやみ給ふ人をなく、やは命  
だふたもたせ給は、何事をか御覽せざらん。いであ  
るをこや。老法師世と侍らん限りはと、頼もしげと聞  
ゆむ。さりともとおぼす。し。

か、る程ふ、一條殿をば、今、女院こそ、い知らせ給へ。  
か、此殿の女君達、鷹司なる所、を任給ふ、内大臣  
殿、忍びつ、おぼし通ひけり。寝殿の上と、三君をぞ  
聞えける。御かたちも心もやむどなりおぼすとして、父  
おぼし、いみじうかしづき奉り給ひき。女子はか、ち  
をこそ、といふ事、よそ、かしづき聞え給ひける。その

女子のいさぎよ  
そ、女子の容儀を  
みて、ま、いさぎ  
よ、ま、育ち、ま



ふこ

たしきざせ  
哀慕のしき色をま  
て、四君と挑むこ

おどーまこえん  
云々 骨うせし  
て懲らし奉らんと  
て之ものりといふ

寝殿の御方ふ、内大臣殿ハ通ひ給ひけるふちん有り  
ける。かゝる程ふ花山院此為光四君の御もとよ、御ふみあ  
ど奉り給ひけしきたゞせ給ひけきど、けしからぬ事  
とて聞きいせ給はざりけきバ、たひく御えづからお  
はしましつゝ、今めかしうもてなさせ給ひける事を  
内大臣殿ハよも四君ふをあらじ。此三君の事ならん  
と推量りおぼいて。わが御はらからの中納言ふ、此事  
こそ安からずおぼゆき。いかゞすべきと聞え給へバ  
いでたゞおのきふあづけ給へれ。いと安き事とて、さ  
るべき人二三人具し給ひ、此院花山の鷹司殿より月いと  
明きふ、御馬よて歸らせ給ひけるを、おどし聞えんと  
おぼしおきてける物ハ、弓矢といふ物志て、とかく志

も歎相もてものか  
あといふ小同じ  
る限りおどし  
ませバ云々、いりふ  
をいへ物おぼせ  
給ふぬ、いりふを  
ハあれぬ、おどし  
あ奉らぬ、いりふ  
り恐れ給へざらん  
とて  
こしさまの云々  
お中の事忍びあ  
るきふ、おどし  
宜からぬ、おどし  
起りし、おどし  
いりふ、おどし  
おどし、おどし  
み給へり、とて

給ひけきバ、御その袖より矢ハ通りにけり。さこそい  
みじう雄々しくおはします院たるも、事限りおはし  
ませバ、いかでかは怖ろしと思さざらん。いとわりな  
ういみじとおぼしめして、院ハ歸らせ給ひて、ものも  
覚えさせ給はでぞおどしませける。是をおぼやけよ  
も道長殿ふもいとよう申させ給つべけきど、とさまの素  
ふりよからぬ事のおこりなれを、恥かしう覚えられて、  
此事散らさじ。後代のちぢありと忍ばせ給ひけきど、  
殿ふも公にも聞しめして、大かこ此頃の人、口に入  
りたる事ハ、是になむ有りける。太上天皇ハ世よめで  
だきものおはしませど、此院花山の御心おきての、重り  
かならずおはしませばこそあま。さは有りながらい

太元法 太元師の  
秘法なりよふなほ  
いとぬ法を行ふと  
かきてこゝみ其う  
をあらうたるこ

こぞあさましうか  
うしえく 去年疫

とく辱けなく怖ろしき事なれば、此事かく音たうて  
はよもやまどしと、世人いひ思ひごと。又太元法といふ  
事ハ、唯おほやけのみぞ昔より行はせ給ひける。たゞ  
人いひとじき事あまど、行ひ給はぬ事なりけり。そま  
を此内大臣殿忍びて此年ごろ行はせ給ふといふ事、  
此頃聞えて、こまよからぬ事の内ふ入りたなり。又女  
院東三條の御悩みをりいかなる事ふかとおぼしめし、御  
ものつけたなどいふ事ども、あれハ、此内大臣殿を、猶  
御心おきて、心をさなくてはいかならばあべうらんと、  
傾きもて悩み聞ゆる人多かるべし。かくいふ程ハ  
長徳二年丙申ふありぬ。二三月をうりふなりぬれば、去年  
浅ましかりし所くの御はてども、あるハ同ト目ある

疾ふりりて失せ  
一人の一周忌とい  
ふこ  
所く子由その色か  
らり 標しそ藤あ  
し喪服と脱ぐと  
いふ本邦喪服社  
判ハ一年を限りと  
せり

ぬを人あさり 盗  
賊探索なり太索  
とかきおほあなぐ  
りともいひて當時  
折り行かれさあ  
りき

ハ次の目などうち續きてこゝかしこおぼし營みた  
り。いとじう哀ななん。所く小御ぞの色うはりあるハ  
薄おびあどよておはするも哀あり。立む月ふぞ祭と  
たゝあるより、世の人口安からず。祭はてゝなむ花山院  
の御事などいづくべきなどいふめり。あまものぐる  
ほし。ぬす人あさりすべしあどこそいふめれなど、様  
様いひあつうふも、いかなといとほしげふなん見え  
聞ゆめる。いかなるべき御事よかと、心苦しうこそい  
侍を。

標  
榮花物語抄卷一終

